

第一話

「ついに恨みを晴らす時が来たわ……どれだけこの日を待ち望んだ事か……」

「そうね、あいつらに人生を滅茶苦茶にされたと言っても過言じゃないわ」

事の始まりは半年前。礒江の夫が会社で理不尽な理由からリストラされてしまい、その後家庭内の状況も悪くなり離婚。そして礒江が会社のマンションから転居する日に三人の女、鏡子と佳奈美と美那子が礒江の元を訪れた。

決して励ましの言葉を言いに来たのではない。人生転落の最中の礒江を見下し嘲笑いに来たのだ。遠回しな嫌味や、ニヤついた表情。その態度で礒江は直感的にリストラとの関連を悟った。

この三人には、マンションに来た時から好きになれ

ないところが多くあった。三人の夫は会社では上役であり、マンション内でもそれを盾にするような高飛車な態度が目立った。

時には目の敵にされて酷い言い掛かりをつけられ、耐え難い仕打ちも受けたが、磯江は、今後の付き合いもあるからと、涙を吞んで耐えてきたのだった。

鏡子達三人が磯江に拘る理由はその美貌である。普段から必要以上に容姿に気を遣う三人も、そこそこの顔立ちとスタイルであり、本人達もその自覚はしていた。

だからこそ、美しい磯江への嫉妬心も強くなっていたのだろう。しかし、磯江はいくら嫌味な女達でも、そんな理由で一人の人間の人生を棒に振るような人道から外れた行動をする筈がないと信じたかった。

だが、心の奥底ではどうしても疑いが拭いきれず、徹底的に調べつくした結果、最も恐れていた信じたくない結果が顔になった。

リストラは三人が裏で仕組んだことだったのだ。それぞれが夫に、マンション内での磯江がいつもトラブルの元になっていて、周りに悪影響があると大袈裟な表現で相談し、排除するべき夫婦だと刷り込んだ。

ちょうど、不況の時代であり、磯江の夫は三人の企み通りに人員削減の餌食にされてしまった。

それを知った磯江はやりきれない思いで一晩中泣き通した。一番の友人である優美子に相談し、目を真っ赤に腫らしながら収まらない怒りを打ち明けた。

次第に心の中の復讐心が燃え上がり、このまま泣き寝入りで終わらせず、高漫な女達を戒める決意が固まっていった。

友人の優美子も協力してくれると快諾し、磯江は感激した。

優美子二十八歳。個人病院の主任婦長。夫が病院の院長である為、院内の仕事を任される事も多い。そして彼女が磯江の復讐に協力する理由は友達の仇討ち以外にももう一つあった。

前から優美子は SM を趣味とし、クラブで男を虐げサドの快樂を味わっていた。だが最近はそれだけではもの足りなくなっており、別の刺激が欲しくなっていた時期であった。その為、今回の復讐で今までに辱めたことのない同性を SM の拷問で陵辱出来るので、期待や好奇心でいっぱいだった。

優美子は礒江に SM の事を相談し今回の復讐計画に入れるように持ち掛けた。礒江は以前から優美子の趣味を知っており、何度か誘われたが、自分にはそんな残酷な仕打ちは出来ないと言って SM には今まで興味が持てなかった。

だが、今回の復讐は時間をかけてじっくりと精神的な屈辱を味あわせたいと考えた。

その手段として SM 拷問はうってつけであり、仕返しとしては充分すぎる程の事が出来る。礒江は頭の中で、いつも高漫な女達が、泣き崩れ、自分に命乞いをするように許しを乞う姿を想像すると、これまでにない興奮を覚え、体の奥底がジワリと熱くなるのを感じ

じた。

この半年間、磯江は優美子のもとで SM のあらゆる知識を学び、それと並行して体術格闘も身に付けた。

「昨日はうまくいったわよ、優美子。ほら見て、写真もばっちり」

優美子に渡された数枚の写真。そこには最初のターゲット佳奈美の淫猥な姿が写っていた。

「すごいわ、うまくいったみたいね」

「予定通りよ。明日あなたの病院に来るはずよ。そこでたっぷり泣かしてやるわ。フフフ、まあ昨日も子供みたいに泣き叫んでいたけどね」

「どんな事したの。詳しく聞かせて」

「それはね……………」

——昨日の出来事……………」

磯江は佳奈美が不倫をしているという秘密を突き止め、それをもとに脅し、ホテルの一室に呼び出した。佳奈美は不倫のこと話すとすぐにホテルに来る事を承諾した。

佳奈美は三十歳。三人の中では一番年下である。磯江が佳奈美を最初のターゲットに選んだ理由は、抱いている恨みの多さの順番だった。佳奈美は主犯ではなく、いつも二人のあとを付けて歩いているだけだったが、それでもリストラに関与していたのは事実であり許す事は出来ない。

——ホテル ある一室 PM9 : 00

「あら、よく来てくれたわね。佳奈美さん。半年ぶりかしら？」

佳奈美は部屋に入るなり血相を変え、すぐに話し出した。

「どういうつもりよ。なにが目的。さっさと写真のネガよこしなさい。どうせお金なんでしょう」

必死の佳奈美に対して、余裕な顔に笑みを浮かべ、タバコを吸いながら対応する磯江。半年前と立場が逆転している。

「まあ、落ち着いて。とりあえず座りなさいよ。不倫現場の写真の事を話す前に、聞きたい事があるの」

「……な、なによ」

「半年前、私の夫はリストラにあったわ。理不尽な理由でね。そして、あなた達三人が最後に私のところに訪れて、さんざん嫌味を言ったわね。覚えてるかしら？」

「……そ、それがどうしたのよ。今はそんな事を言ってるんじゃない……」

「黙りなさい！」

大声で叫んだ磯江に、一瞬びくついた佳奈美。

「人の人生を弄んどいてよく平然としてられるわね。全部知ってるのよ。あんた達がしたこと……」

「……………」

「だからね、私、あなた達に復讐する事に決めたの」

「ふ、復讐ですって？」

「そうよ。あんた達三人、私が受けた屈辱と同等、いえ、それ以上の事をしてやるわ」

形相が変わった磯江に、恐怖を感じた佳奈美。

「な、なにをやるっていうのよ。もう過ぎた事じゃない。それにあれは私は、あまり関係ないわ。他の二人がやろうって言ったのよ。そう、とくに鏡子が。だから……」

「自分が助かる為には、友人も売る。さすがだわ。そんな根性だから平気でモラルから外れた事も出来るのね」

佳奈美は、いくら状況が悪いとはいえ、以前は見下していた磯江に好き勝手言われている事が悔しく、腹

立だしくなってきた。

「い、いい加減にしなさいよ？　なにが復讐よ。どうせ最後には金をくれって言うんでしょ？　いくら欲しいの？　さっさと金額を言って、写真のネガを返しなさいよ！」

「フフフ、佳奈美さん、よく考えて。この写真をばら撒いて、あなたの人生を滅茶苦茶にする事も出来たのよ？　復讐を最優先する私が、なぜあなたをここに呼んだと思ってるの？」

「……な、なぜよ。だ、だから目的はお金なんですよ？」

「本当、あんたって金、金ってそればかり……まあ、いいわ。どうせ今からお仕置き出来るし。ここに呼んだ理由はねえ……あなたに死にたくなる位の屈辱を

与えるためよ！」

「く、屈辱って……な、なにを言って。な、なにを
する気なのよ……バカな事はやめなさい……」

徐々に増していく不安を隠せない佳奈美。

「いいわよ？ 帰りたいならそうしても。でもこの写
真を全部あなたの周りの人に送り付けてやるからね」

「なっ……そんな……」

「大変ねえ、旦那さんとは離婚になるかしら。会社で
も問題になるんじゃない？ それじゃこれから頑張
ってね。いろいろ、揉めるでしょうけど」

席を立ち、部屋を出ようとする磯江。

「まっ、待って、待ちなさい！ 分かったわよ。どうすればいいの？ 気が済むようにすればいいわ……」

当然の結果に思わず、笑いが込み上げる磯江。

「気が済むようにねえ。フフフ、今言った事、忘れないでね」

勢いで出た発言に僅かな後悔を感じる佳奈美。

「それじゃ、まず裸になりなさい。いい？ 下着も取って素っ裸よ」

「……なっ……」

いきなりの思いがけない発言に戸惑う佳奈美。

「どうしたの、なんでも聞くんでしょう？ いいこと、今日はあなたは私の奴隷よ。どんなことでも私が言った事を素直に聞くの。さあ、早く」

半年前とは違った彼女の堂々とした態度に驚く佳奈美。ついこの間までは、見下して、飼い犬のように見えていたが、今は逆に命令される立場に悔しさが滲む。

「うう……な、なにが楽しいのよ。私が裸になったって。同性じゃないの」

「分かってないわね。あなたは言われた通りにすればいいの。いつも私を三人でいじめてくれたわね。わかってるのよ、私の若さと容姿に嫉妬していたこと。あなた達、普段から濃い化粧して美容には必要以上に気を使っていたわね。だから、その自慢の肉体がどの程度か隅々まで見てあげるわ」

「……そんな、いやよ。絶対にいや……なんで、あんたなんか」

すると磯江は、佳奈美に近づくと腹部に強烈な一撃のパンチをお見舞いした。

「うぐっ！ ……ゲホ、ゲホッ。な……なにをするの！？」

続けて、ビンタも食らわせる。

「佳奈美さん、私この半年で体を鍛えて格闘技とかも習ったの。復讐の為にね。私に口答えすると容赦しないわよ。怪我したくないなら素直になりなさい」

そう言うと、最後にもう一度、佳奈美の頬にビンタを食らわす。

あまりの仕打ちに涙ぐむ佳奈美。殴られた経験がな

く、恐怖で震える。

「さあ、はやく裸になりなさい。コンドはこれで叩くわよ」

SM のムチを用意し、数回鋭い音を立てながら空を切る。その仕草に恐怖する佳奈美。怯えて、涙を滲ませながら服を脱ぎだした。上下を脱ぎ、下着になると動きが鈍くなる。

そんな佳奈美の挙動を見逃さず、ムチを振りかざす磯江。数回、体を叩くと、佳奈美の苦悶の音が響く。

「わ、わかった、脱ぐ、脱ぐから、ううう……」

震えながらもすぐに行動に移す。下着も取り、素っ裸になった佳奈美は、陰部と胸を隠し背筋を伸ばした。

「手、どけなさい」

「お、お願い。もう……」

「今度は、体に傷を付けるわよ」

その一言に脅え、すぐに手をどける。

「陰毛は濃いよねえ。胸はたいしたことないわね」

タバコをくわえて、近づき乳房を掴み揉みしだく。

「うう……ううう」

「まだ泣くのは早いわよ。この程度、私が受けた仕打ちに比べれば」

今度は陰毛を掴み、さらに奥深くに手を入れる。

「あああ……や……」

「ねえ、佳奈美さん。よくも私を、酷くいじめてくれたわね？」

「うう……うう」

「聞いてんのよ。返事」

「……ひ……そうよ」

再びビンタが飛ぶ。

「返事は、はい、よ。私には敬語を使いなさい」

「……は、はい……ううう」

悔しさで涙がこぼれる。

「さっきの話の続きだけど、いつだったかしらね。あなた達のいじめに耐えられなくて私が反抗したら、あなた、私に、それ位で怒るなんてケツの穴が小さいって言ったわね」

「……………」

「あれ、たしかあなたが言ったわよね。ねえ、佳奈美さん。あのときはすごく頭にきたのよ？」

「……は、はい。ご、ごめんなさい。悪気はなかったのよ。本当に……」

「悪気はない、よくもそんな事を。口じゃなんとでも言えるわ。態度で示してもらわないとね。佳奈美さん、あなたのケツの穴、私に見せなさい。どれだけ大きいか見てやるわ」

「な、なっ……………」

「人に威張って『ケツの穴が小さい』なんて言えるんだからあなたのはよっぽど大きいんでしょうねえ…
…もし普通の大きさがだったら私をコケにしたこと許さないからね。さあ、後ろ向いて自分でお尻の肉を割って見せなさい」

「……い、や。そんな事出来ないわ。お願い。謝るから……」

「はやくなさい？ もう一発、お腹にお見舞いするわよ？」

さっきの激痛が思い出され、佳奈美は体を無意識に後ろに向けた。尻肉を両手で持ち開こうとするが、羞恥心が邪魔をして躊躇ってしまう。その様を眺め、磯江は満足し優越感に浸る。

「みじめねえ、佳奈美さん。どう？ 立場が逆転した気分は。いつも、いじめていた相手にお尻の穴を見せるなんてね。フフフ」

「ぐ……ぐぐ……うう」



後ろを向いている佳奈美の顔は、大量の涙に濡れていた。

「さあ、さっさと肛門を見せなさい」

少しずつ、開かれていく尻を凝視する磯江。その視線を感じ、赤面する佳奈美。

「見えてきたわね。あら、シワが多いのね。もっと開きなさい！」

「あ、あああ……」

完全に露出した佳奈美の肛門。そこに向けて磯江はカメラ取り出し、シャッターを押した。

「……なにを、写真を……そんな……酷い。返しなさい」

い」

我を忘れ、必死になって礒江の持つカメラに手を伸ばす佳奈美は、すぐに礒江の体術により、押さえつけられる。

「なに生意気な口きいてるの？ さっき言ってたじゃないの、なんでも言う事聞くって。今日一日で終わらせはしないわ。その為にも恥ずかしい写真を撮らないとね。あなたにはいろいろ働いてもらおうわよ。あと二人を誘き出して貰わないといけないしね……」

「……い、いや……もうこんな事……許してよ」

「泣き言言ってんじゃないわよ。さっさとまた肛門を見せなさい。今度は四つん這いよ。不倫の写真もあること忘れないでね」

もはや、抵抗しても無駄だと悟った佳奈美は、泣きながらも四つん這いになった。現れた性器と肛門に向けて再びカメラのシャッター音が響く。

「ねえ、私にケツの穴小さいって言ったわりには、あなたもそんなに大きくないけどどう言う事かしらね？」

佳奈美の尻を持ち抱えて、真上から肛門を眺めている磯江。黙りこむ佳奈美に磯江は中指と人差し指、二本で肛門に向けて振り下ろしシッペをした。

「い、痛……ひっ！ やめて」

敏感な皮膚に感じ痛みよりは、他人に肛門を叩かれた事による精神的な苦痛がたまらなく堪える。逃げようとする佳奈美だが、磯江の力が強く抜け出せない。

もがく彼女にまたも二本の指で肛門を叩かれる。

「い、いたいってば、やめてよ。お願い。謝るから…
…お願いよ……」

しかし、三度、四度と指は振り下ろされる。

「どう？ いじめられている気分は。なにを言っても
聞き入れてもらえず耐えるしかない。私のつらい気持ち
少しは分かったかしら？」

「……………うう……酷い。なぜ……こんな……」

「分かったかって聞いているのよ？」

「ああああっ……」

またもシッペの攻撃に思わず声をあげる。

「あともう三十回位叩いたら、腫れ上がって少しは大きくなるかもね。どう？ 佳奈美さん、そうしてあげようか？」

「ひいっ！ やめて、やめてよ。お願い……許して！」

当然、礒江は肛門を傷つけはしないつもりだった。いままでのシッペも手加減していた。まだ、佳奈美のアナルには様々な辱しめを行いたい為、下手に傷をつけては面白みがない。佳奈美は敏感なところを叩かれた事で、精神的な痛みが増していただけだった。

「うう……ううう……」

相変わらず泣いている佳奈美。だが、容赦ない礒江は次の行動に移った。

「ああ……あああ……」

肛門から感じた不気味な感触。声を出さずにはいられない。磯江は中指を肛門奥深くに押しこんでしまった。

生まれて初めて経験する感覚に、佳奈美の羞恥心は一気に高まる。磯江は構わずに指を激しく出し入れする。

「気持ちいいかしら？ 佳奈美さん。お尻の穴は……」

「い……いや……もう……ううう……」

磯江は苦痛に歪む佳奈美の顔を眺め、再び写真を撮ると、復讐をしている今の現実に酔い、これから行う、三人の女の蹂躪を頭の中で想像していた。

第二話

「まあ、そんなところかしら。で、これがその時の写真。ほら、肛門に奥深く指が埋まっているでしょう。見てよ佳奈美の苦しそうな顔」

酒を飲みながら、陵辱に打ちのめされた一人の女の姿を堪能する。優美子は苦痛に歪んでいる佳奈美の表情を見ると、サドの快楽が全身を駆け巡る。それは、秘部から溢れる、淫汁が物語っていた。

「それにしても、ケツの穴が小さいって言われた事を恨んで、仕返しに実際にお尻の穴を見るなんて、あなたすごい行動に出るわね」

「なに言ってるの。アナルを中心に辱しめるってアドバイスしたのは、あなたじゃない。フフフ、まあ、私も大賛成だったけど……」

「そうよ、三十路の汚いマンコを責めるより、肛門を徹底的に玩具にしてやった方がいいわよ。精神的苦痛っていう事じゃ、他の方法はないわ。今回は生かさず殺さずよ。あなたは長い間いじめられたんだから、同じ時間いじめ返してやらないとね。まあ、アナルは私も大好きだしね」

肛門の陵辱。優美子の提案。おそらく、気高い女はアナル挿入など経験がないどころか、触られた事もないはずである。そこに付け込み、同性の手で最高の屈辱を与える。それは人生を滅茶苦茶にされた磯江と、同等の苦しみであるはずだ。

「まだまだあるのよ」

数十枚の大量な写真。始めの一步だけに、その熱意は写真に現れていた。全ての写真を念入りに確認し、興奮する優美子。

「すごいわね、磯江。脅しとしては充分よ。この女、さぞかし泣いたでしょうね」

「そりゃあ、もう。でもね、佳奈美が泣く姿を見てる内に、なんていうか屈服させる喜びを感じたわ。あの時はなんか、性的な快樂だったわ。私ね、第一に復讐を考えていたけど、それと同時に新しい楽しみも出来たわ」

サドに心が侵食される磯江は、いままでになく美しい顔立ちをしていた。

「あ、そうそう。忘れるところだった。最高の写真を撮ったのよ。私の自信作、見てよ」

A4サイズに印刷された写真を、専用封筒から取り出し優美子に見せた。

「……わあ、すごい格好。同性でも見てるこっちが恥ずかしいわね。ね、ねえ、これどうやって撮ったの？
ハア、ハア……なんか興奮してきたわ」

二人は、酒と性的興奮に似た、なんともいえない快樂に酔いしれていた。磯江は自慢のA4写真の事を語る。

—— 一日前、ホテルでの陵辱

ホテルでの同性の陵辱は続いていた。一室で繰り広げられる女による女の陵辱。一人は全裸で泣きながら、必死に耐える。もう一人は、同性の体を、まるで玩具のように弄ぶ。

「どうかしら、佳奈美さん。お尻、少しは気持ちいいかしら？」

このホテルに来て、僅かな時間しか経っていないが、

佳奈美にとっては長時間の感覚。予定では現金と引き代えに不倫現場写真のネガを貰い、すぐに帰るはずだった。

それがまさか、自分が苛めていた同性に裸にされ、肛門に指を入れられるなど夢にも思わなかった。直腸から伝わる他人の指が起こす振動。指が動く度に激しい嫌悪感と屈辱が刷り込まれる。いや、同性に受けているこの陵辱は、とても言葉では表現出来ないだろう。

「もう……うう、お願い。指抜いて……たえられ……
ああ……う……動かないで……」

「へえ、肛門の中ってこんな感じだったんだ。なんか気持ちいいわね、この感触」

「……ううう」

もがき苦しむ佳奈美などお構いなく、しばらく指を

動かす磯江。そして差し込んでいた 指を抜き、そこに付いた汚物を眺め、臭いまで嗅いでいた。

「ねえ、佳奈美さん。見てみなさい。私の指になんか変な物が付いているわ。これすごく臭いわ」

伏せていた佳奈美の頭を掴み、無理矢理指に付いた便を見せつける。自分の汚物を見せ付けられ、耐えがたい辱しめを受ける。

「これ何かしら。あなたのお尻の穴から出てきた物よ。ねえ、この茶色い物はなに」

「……あ……あああ」

「なにかって聞いているの。あんたの口に押し込むわよ？」

恐ろしい言葉にいままでにはない脅え方をする佳奈美。今の磯江なら、言葉通りの行動に出してしまうかもしれない。そう思うと、羞恥心など吹き飛んでしまう佳奈美。

「ひい……便よ……」

「便、なに上品ぶってるの？ 他の言い方」

「……ああ……う……んこです」

「誰のかしら？ 誰のどこから付いたウンコ。はっきり言ってちょうだい」

「わ、私の……お尻の穴から付いて出た……ウンコです」

佳奈美は屈辱の言葉を言い終わると、目から涙が溢

れ、泣き崩れてしまった。磯江は、屈辱の言葉を無理矢理言わせた事により、泣いている女を見ると、いままでにない快楽を得ていた。

自分の陰部に手を持っていき、その快楽を確認する。

「アハハハ、いつも威張っていたあの頃の顔を思い出すと笑いを押さえられないわ。あんな上品な佳奈美さんがウンコだなんて。それにしても臭いわよ、このウンコ。あなたも臭ってみなさいよ」

佳奈美の鼻まで持ってこられた中指。

「ちゃんと臭わないと許さないからね。息を止めて誤魔化したら、このウンコを綺麗に舐めさせるわよ」

泣きながらも中指を臭いだす佳奈美。自分の体の中の臭いとはいえ、当然強烈な悪臭がする。一呼吸する度に、嘔吐感を刺激する程の悪臭と、体が高熱の時

のように羞恥で熱くなる。自分の肛門の奥底から無理矢理取り出した僅かな便を、強制的に嗅がせられている女を見下す磯江。

「それにしても臭いわね。あなたちゃんとウンコ出てるの？ 私をいじめてストレスを発散させていたから、便秘にはならないはずでしょう？」

磯江は中指の排泄物の汚れを、佳奈美が着ていた服を使い拭き取っていた。その様子を震えながら、悔しそうに唇を噛み締めて見つめている佳奈美。そんな彼女の僅かな反抗態度も見逃さない。反抗を示した表情に向けて、磯江が片足を顔面に乗せ、押さえつけた。

「……や……やめ……なにをするの？」

「あんが反抗的な顔をするからいけないのよ。私には絶対服従、分かりましたかしら」

「……………」

「分かってないのね？ もう一回肛門を出しなさい」

「ひ……ゆ、許して……わかったから……わかったから」

「肛門」

「……もう……いやよ。お願い。お願いよ」

「肛門、もう一回私に言わせたらタバコの火を押し付けるわよ。肛門の真中の穴にね」

「あ……あああ。分かったから、そんな恐ろしい事は言わないで」

すぐに四つん這いになり、再びアヌスが露になって

しまった。

「あら、面白くないわね。そんなにあっさり肛門を出すなんて。でも、タバコで肛門を火傷させて病院に通わせるっていうのも悪くないわね。

フフフ、それにしても佳奈美さん、あなたいい年して汚いケツの穴をそんなに露出して恥かしくないの？」

「……じ、自分が言ったくせに……………耐えないと…
…駄目よ、我慢しないとこの女、何をするか……………」

佳奈美は自分に言い聞かせるように呟いた。

「何か言ったかしら？ さっき私があなたの服でウンコを拭き取った時、すごい顔で睨んだわね。よっぽど悔しかったんでしょうね。そんなに嫌なら、もっとしてあげるわ」

佳奈美の着ていた下着を持ち、それを肛門に押し付けてしまった。まるで、排便のあと汚れを拭き取るように押し付ける静江。

「な、なにを……そんな……」

白色な下着は、所々に茶色が付き、原形の色を変えていた。その汚れていく下着を面白そうに眺め、臭いまで確認する磯江。佳奈美はようやく自分の下着を肛門に押し付けられていた事を知ると、無駄だと知りつつ、頼み込むしかなかった。

「……もう……もう……やめてよ。こんな事って……」

沈黙のまま佳奈美の服を汚す磯江。さらに、磯江は佳奈美のパンティーを持つと、今度は自分の肛門に押し付けてしまった。パンティーの真中を人差し指でかぶせ、奥深くまで挿入し肛門内部、直腸の壁の汚れを

掬い取る。磯江はその汚れを確認すると、予想以上の結果に喜びの笑みを浮かべる。

「見てよ、このパンティー。真中に円形のウンコがはっきり付いているわ。これ私のお。フフ　フ、佳奈美さん。ちゃんと服を着て帰るのよ。いいわね、ウンコが付いた下着をよ」

佳奈美は、生気が抜けたような顔立ちで、磯江の辱しめを呆然と見つめていた。それから数時間、磯江の強制的な羞恥ポーズの写真を何十枚も撮られてしまった。十分に磯江の恐ろしさを実感した佳奈美は、納得いかなくとも従うしかなかった。写真のほとんどは肛門を中心に撮られていた。

「今度はこのボールペンを突っ込むわ。ほら、もっとお尻開いて肛門を出しなさい」

ボールペンを肛門に半分以上入れられ、さらに笑顔まで要求されてしまった。再度の惨めな姿に、もはや涙はかれ果てていた。僅かな抵抗や、戸惑いを見せただけで、容赦なく振り下ろされるムチの痛みに脅え、理性など消えていた。

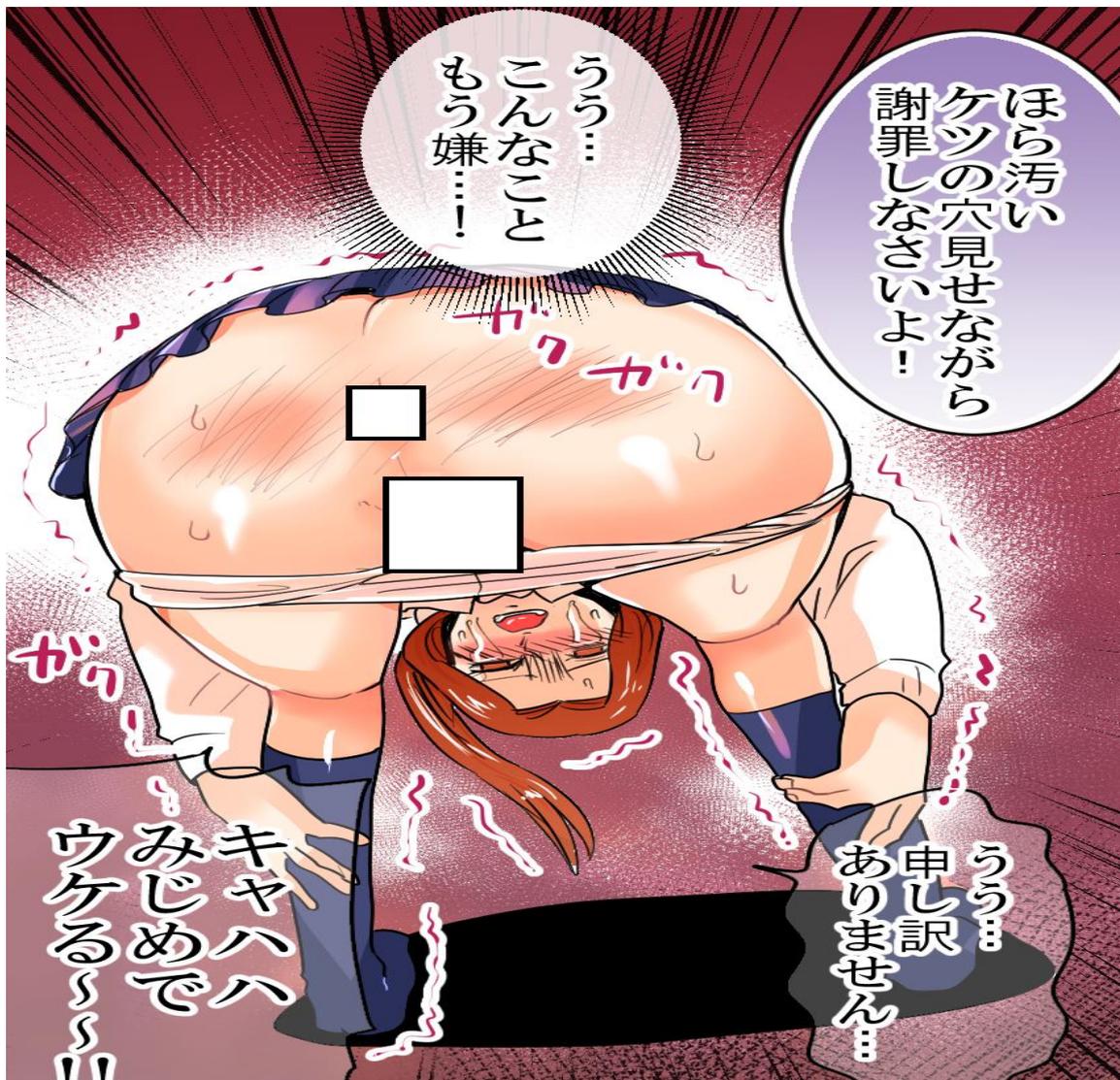
「これだけ撮れば、とりあえずいいか。あ、そうだ。最後にと……佳奈美さん、後ろを向いて足を開いて、そのまま上半身を下ろして、あなたの顔を開いている両足の間から見せて」

言われた通りの行動に移る佳奈美。実際にその行動をすると、恥ずかしさで赤面する。

「ブ……アハハハ……最高ね。なんて見っとも無い姿なの。あんたの顔とマンコと肛門が丸見えよ。あ、なんか肛門が少し隠れているわ。もっと足を曲げて肛門を見せなさい」

この世のものとは思えない羞恥。泣きながらもその格好をやめられない現実。

「なに泣いてるの。ほら、笑顔。笑ってよ。このムチでその汚いケツの穴と、マンコを叩かれたくなかったらね」



必死の笑顔を作る佳奈美だが、その表情は不自然だった。しかし、磯江は恐ろしい脅しで佳奈美に、自ら喜んでこの格好と取っているような笑顔を作らした。

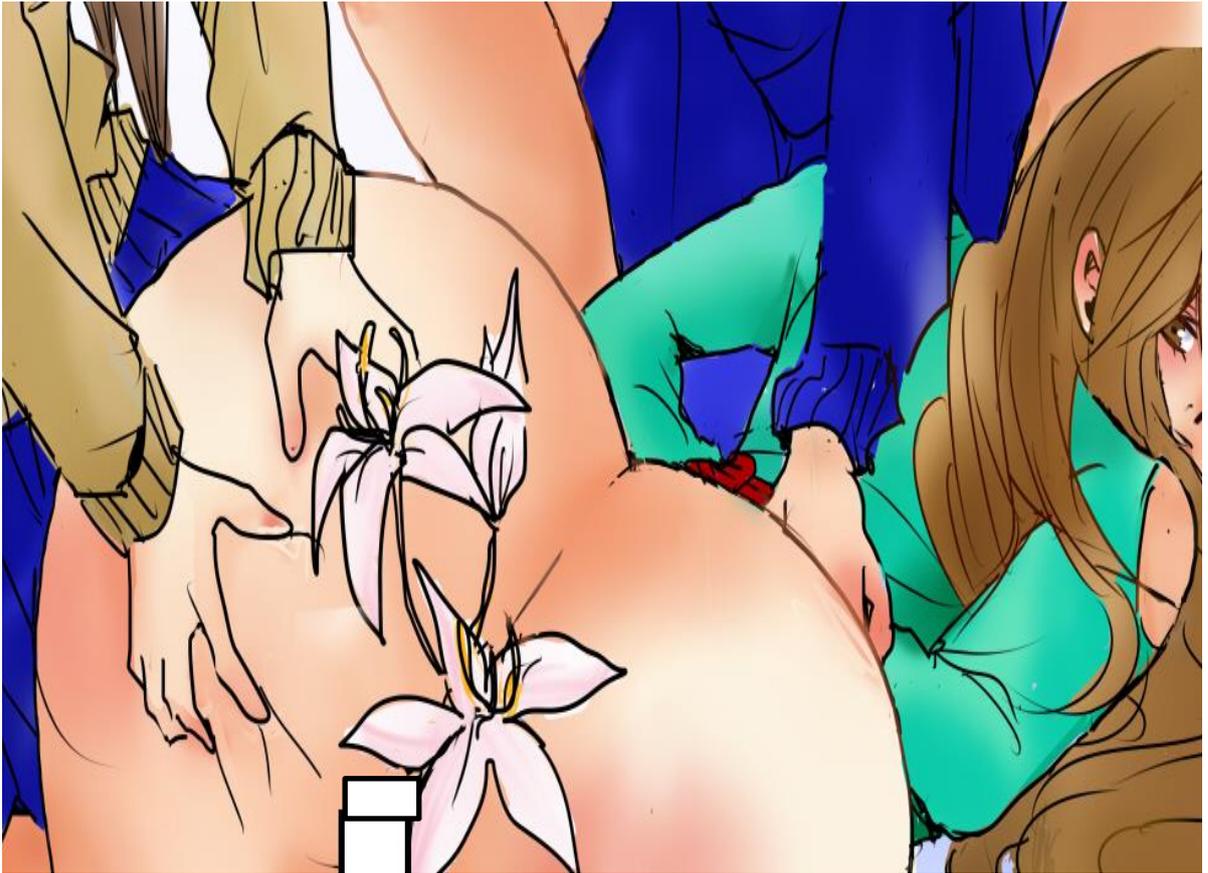
「いいわね。そのまま。これで最後にしてあげるからね」

ここに来て、初めての安心した瞬間があった。佳奈美も、これで最後だと知り、早くこの羞恥から逃げたいため、素直に受入れる事を覚悟した。その傍ら、磯江はホテルの花瓶にさしてあった、飾り用のバラの花を持ち出すと、佳奈美の肛門に差し込んでしまった。飾り用の為、トゲは抜き取ってある。

「痛、な……なに。なにしたの」

「いいから、ほら笑顔」

肛門にバラ花を差し込まれ、笑顔でカメラに写された佳奈美。しばらくして、自分の姿に気付いた彼女は、青ざめて自暴自棄になっていた。



「……も、もう、終わりだわ。こんな写真を……こんな写真をこの女に撮られたら……なんでも聞かないと……あんな写真だと……言い訳も出来ない。あああ

……なんで、こんな目に……」

「最高の写真が出来上がりそうね。佳奈美さん、バラ写真はA4サイズで現像するわ。いいわね。これから私の言う事を聞くのよ。まあ、別に逆らってもいいけど、この肛門にバラが活けられた笑顔の写真が世間にばらまかれるわよ。でも、それも楽しそうね？」

「ひい……そんな事はやめて。……ねえ、もう充分でしょう。あとは二人に……もう酷い事わ、もう……」

脅える佳奈美に冷たい口調で喋る磯江。

「なに言ってるの。まだ終わらないわ。あなたにはもう少し恥かしい目に合ってもらわないといけないよ。うね。いつも三人であれ程、つるんでいて仲が良かったのに、自分の為に犠牲にするのね」

「ああ……ああ、そんな。許して。もう、いやよ」

「明日ここに来なさい。他の二人について聞きたい事もあるしね」

優美子の病院の名刺を渡し、その住所を確認させた。

「な、なに。内科の病院。な、なぜ病院なの。なんの為に……」

「私の隠れアジトって言うところかしら。いい、絶対に来なさいよ。明日、午後二時よ。もし来なければ言うまでもないわね。まあ、私は写真をばら撒いて、あんたの人生を終わらせるのも悪くはないと思っているからね。

一分でも遅れれば、すぐに行動にうつすわ」

俯き、泣きながら頷く佳奈美。その後、自分と磯江の肛門で汚された下着を着て、嫌悪感に震えながらホ

テルを出ていった。

「どう、こんな感じであの女を脅したの。明日は絶対に病院に来るわ」

優美子は、A4写真肛門にバラが刺さった佳奈美の写真に見とれていた。レズとサドの趣味がある優美子は、佳奈美が気に入ったらしく、心の中で羞恥心に脅える姿を想像し秘部を濡らしていた。

第三話

「よく来たわね、時間通り。待っていたわ」

震えながら、優美子の病院に訪れた、佳奈美。笑顔の磯江を見ると昨夜の惨劇が蘇る。散々に打ちのめされた出来事、気高いプライドなど一瞬にして砕かれ、死にたい位の辱しめ。

最後は自分と磯江の排泄物を付着した下着を来て、帰らされ自宅に辿りつくまで、足取りは重かった。すぐにシャワーを浴び、悪魔の出来事を忘れようとするが、いまだに肛門に感じる異物感が、そうはさせない。

「なんであんな女に……」

佳奈美は、屈辱より、悔しさに心が一杯だった。いくら自分のまいた種とはいえ、昔は奴隷のように扱っていた年下の女に、好き放題にやられた事に胸が張り

裂けそうだった。

しかし、今の現実には立場が逆転し、反抗する事などとても出来ない、明日は磯江の言った通り、病院に行くしかないと思っていた。

あれほど酷い仕返しをされ、磯江の気は十分に晴れたはずだと思い、もはや自分には災いは降りかからないと思う佳奈美だったが、彼女には昨夜よりも過酷な辱しめが待っていたのだ。

「今日はこの病院、休みなの。こっちの裏口から入るから付いて来なさい」

「ね、ねえ、なぜ病院なの。今日は二人の事を知りたい為に私を呼んだんでしょ。だったら他の場所で…
…」

「いいから黙って来なさい。昨日の写真の事を忘れないで」

その一言に、体が熱くなる佳奈美。自然と体は礒江のあとを付いていく。

裏口から、病院内に入り、廊下を沈黙で歩く二人。消毒の臭いや、病院ならではの独特な囲気。休みだけに人影はまったくない。しばらく歩き、内科の診察室の部屋に辿り付いた。

「さあ、ここよ。中に入りましょう」

「し、診察室？ 内科……なんで礒江がこんな病院と関わりが……」

湧き上がる疑問。それと同時に嫌な予感を感じ取っていた。診察室と書かれた札に本能的に戸惑いと不安を感じる。ドアを開け中に入ると、診察ベットや医療器具を目にする。

さらに奥の診断室に向かいそこに入ると、白衣を着た女医と二人の看護師が座っており、その存在に気付い

た佳奈美は目を大きく開け、驚いた。

「だ、誰よ……ちょっと……磯江さん」

不安で焦る佳奈美を無視し、磯江は話しだす。

「優美子、連れてきたわ。この女が佳奈美よ。あら、そちらの二人の方は」

「病院で働く看護師の香味と翔子よ。大丈夫、私の同類よ。信用出来るわ」

「そう……まあそれなら大丈夫ね」

佳奈美は、見知らぬ三人の女に、さっき感じた嫌な予感を再び感じていた。

「佳奈美さん、紹介するわ。私の親友の優美子。この病院の院長の妻であり、婦長でもあるわ。半年前の出来事をいろいろ相談して、今回の復讐を決意したの」

「よろしく、佳奈美さん。磯江の紹介通り、この病院の婦長の優美子です。体の調子が悪くなった時はいつでも来なさいよ。そういえばあなた、聞いた話じゃさうとう酷い事を磯江にしたのね」

心臓の鼓動が高まる佳奈美。自分以外に四人もの同性の存在。話の内容から、磯江の陵辱行動の協力者という事が分かる。

ここに連れてこられた理由は、優美子の存在を教える為の目的だけだと信じたい佳奈美は、心の奥底、無意識の中ではさらなる陵辱、最悪な事になるのではないかと考えていた。

「ふ、二人、美那子、鏡子の話を……私はもう十分に償ったでしょう？　ねえ、早く今日は、用事があるから……はやく帰りたいの、ねえ……」

不気味な雰囲気になれなくなった佳奈美は、自分から話を持ち出した。一刻も早くこの場から逃れるのが先決だと本能で悟ったのであろう。そんな必死の表情を観察して楽しむ優美子は、ゆっくりと口を開いた。

「十分に償ったですって？　まったく、よく自分からそんな事を、たった一日で終わる訳ないじゃない。磯江とは幼馴染の仲よ、だから私も同じように腹が立ってるの」

状況が悪い方向に流れている事に、焦りだす佳奈美だった。

「まあ、いいわ。その事はこれからゆっくりと考えましょう。あと二人も残ってるしね。ところで佳奈美さん、せっかく病院に来たんだから診察してあげましょ
うか？ 今、ちょうど暇してたところなの。
あなたもいい年なんだから、診断は定期的に受けた方が
いいわよ」

診察という言葉に、激しい抵抗が過ぎる。いや、とてもそんな心境にはなれない。自分を陵辱した磯江の親友に見てもらおうなど。

「け、結構よ。……さっきも言ったけど、私、早く帰らないと……」

「私の親友の好意を断る気？ ねえ、佳奈美さん。いいのかしら、写真……」

鬼の形相で睨む磯江。同時に写真の脅し。それには反抗する事など出来やしなかった。

「ご、ごめんなさい。そんなつもりじゃあ……分かったから……う、受けるわ」

「そうよ、人の親切は素直に聞き入れなさい。さあ、こっちに来て座ってちょうだい」

優美子の目の前に座った佳奈美。白衣をまとった優美子は、女医のような貫禄を表し、その姿はまぎれもない医師にもみえた。

「磯江さん、体の調子はどうかしら？ どこか調子の悪いところはないの」

「……い、いえ。別に……」

なにげない問診に少しずつ安堵を感じる佳奈美。病院など、ここ最近は訪れてなどないが、イメージとしてはあまりいいものではない。

見ず知らずの人間に、診察され体を触られることに嫌悪感を抱く佳奈美。

「口を空けて、もっと大きく。……そうね、とくに異常はないわね。睡眠はよくとってる？　じゃあ、胸の音を聞きますから、上半身の服をめくってくれる？」

「……な!？」

「どうしたの、さあ早く。恥ずかしがる事はないでしょう？」

聴診器を耳にあて、身構える目の前の女。胸を出せと簡単に言うが、すぐには行動には移せない。まして、周りには看護師であるが同性二人、そして何より磯江

の存在がたまらない。 礒江の前で、胸だけとはいえ裸を見られる事は、昨夜の悪夢からもう耐えられないと思っていた。

「なにしてるの早く言われた通りにして！」

今まで、沈黙していた看護師が佳奈美の服を一気にめくり上げ、腹部の肌とブラジャーに包まれた胸が露出してしまった。

「や、やだ……」

いきなりの看護師の行動に、驚き抵抗するが、二人の力で押さえつけられ動けない。

強制的な猥褻診断に変わりつつある事に不安を隠せない佳奈美。

その横で、その様子を笑いながら見ている礒江。佳奈美はその不気味な表情を見て、陵辱された記憶が鮮明

に蘇る。……と、同時に頭の中で推測をしていた。

「……こ、この人達、磯江も……最初から私を辱めるつもりでここに呼んだんじゃ？ ……その為に病院に……診察を理由に……い、いや、そんなはずはないわ。そうよ、考えすぎよ。きっと……」

葛藤する考え。続けられる診察。女三人に囲まれ、聴診器の冷たい感覚が伝わる。

「あ、あああ、ちょっと……」

いきなり看護師の翔子の手により、ブラジャーがまくられ、佳奈美の弾力ある乳房が現れた。そこに聴診器が当てられる。

「なに騒いでるの？ 大袈裟ね。心音を聞くには直接が一番なの。何度か診察受けたことあるでしょう？」

私達は見慣れてるからなんとも思っていないわよ。あなたもいい年なんだから、これぐらいで恥ずかしがらないで！」

もう一人の看護師、香味の発言に屈辱を感じ、震える佳奈美。

「はい、大きく息を吸って、吐いて。もう一度。異常はないわね。じゃあ、今度はうしろを向いてね」

背中に当てられる聴診器。数箇所当てられ再び、ひんやりとした感触を感じる。なにげない普通の診断に徐々に安心してきた佳奈美。

「……そうよ、考えすぎよ。ただの診察じゃない。体なんてどこも悪くないし……これが終わればすぐに帰れるはずよ……………」

「いいわ。特に問題なし。こっちを向いて」

「ねえ、もういいでしょう？ 問題ないなら……」

「そうね、最後にお腹を音を聞いて終わりよ」

腹部に当てられた聴診器。そこで初めて、優美子はいままでとは違う診断結果を言う。

「あら、なんか異音がするわね」

隣の看護師、二人が僅かに口元に笑みを浮かべる。それを見落とさない磯江。今回、病院に佳奈美を呼んだ理由は、佳奈美の推測通り、さらなる辱しめを味わわせる事だったが、具体的にどうするのかは磯江は聞いていない。

優美子は、その方が磯江も楽しめるといい、その言葉に納得し、全て優美子に任せていた。いままでの行

動から診察を理由に、何かするのであらうと思ったが、
詳細は分からない。 磯江は先が楽しみだった。

「佳奈美さん、便秘してるんじゃないの。なんかお腹
も硬いわ」

腹部に優美子の手が当てられ、その圧迫感に身を振
る。

「し、してないわよ。便秘なんて」

「本当？ あなた三十でしょう。便秘が多い年頃よ？
今日は出たのかしら？」

「……………！」

「出たの？ 便は……………」

そこで、磯江が口を開く。

「そう言えば、佳奈美さん。昨日、お尻の穴に指入れて、指に付いた便を臭った時、すごく臭かったわよね？」

「や、やめて、そんな話をしないでよ。い、言わないって約束じゃ……」

「大丈夫よ、佳奈美さん。私達も写真は見たわ。全てね。バラの花、綺麗だったわよ。心配しなくても他言はしないわ。

私は磯江の手伝いをするだけ。まあ、あんたみたいな高漫な女が落ちてゆくのを見るのも好きだけど」

「……そ、そんな……ひ、酷い、また女に……また違う女が……」

「まあ、いいわ。それよりさっきの続き。便が臭いって言うのは気になるわね。どうなの今日はちゃんとウンコ出たの？」

とても診察など、受ける気持ちにはなれない佳奈美は黙り込み、下を向いて震えていた。突然、磯江が佳奈美の髪を掴み顔を覗き込む。

「先生が聞いているの。質問には答えなさい！」

「うう……で、出たわよ……」

「あら、そうなの。本当かしら？ その割にはお腹張ってるわよ。佳奈美さん、ちょっと恥かしいかもしれないけど、お尻に浣腸しましょうね」

「……な……か……かん……」

いきなりの予想もしない診断結果に、驚き言葉が出ない。便秘を理由に、自分に浣腸するという女。否定した内容は無視され、強引な診断。まるで最初から、そうするよう決めていたように思えた。

「い、いやよ。そんな事しなくていいわ。絶対にいやよ」

磯江が笑いを堪えて平静を装っていた。強引な診断で便秘とし、嫌がる女に無理矢理、浣腸する。それにより、佳奈美が羞恥心と屈辱に歪める顔を見れると思うと、異様な快感が走る。

あと残る二人、鏡子と美那子の泣き崩れる姿をだぶらせる事で、さらなる面白みも現れる。

「嫌じゃないでしょう、佳奈美さん。先生の言う事は聞かないと駄目よ」

「な……いやよ。磯江さん、お願い。もう……私は昨日あれほど……」

恥かしさのあまり、写真の事を忘れ、必死に抵抗する佳奈美。磯江を含め、四人の同性の前で、尻を出し、そこに薬を注入されるなど、考えただけで耐えられない。

「駄目よ、浣腸しましょう。患者の不健康を見過ごせないわ。恥かしくないでしょう？ 昨日はあんなに、喜んで肛門出してたじゃない」

「よ、喜んでなんて……そ、そんな……ひ、酷い……」

「写真を見る限りじゃ、どう見たってそうじゃない。笑顔で笑っている場面もあるしね。さあ、それよりも、浣腸やりましょうね。看護師さん、佳奈美さんを診察ベットに連れて行って」

「はい、さあ、佳奈美さん」

二人の看護師に片方の腕を持たれ、席を立たされた佳奈美。優美子が言った処置をこれからやられると思うと恥かしさのあまり、鳥肌が立つ。素直に浣腸など受けられるはずはなくその場で抵抗する。

「わ、私、便秘なんかじゃ……お願いよ。お願いだから……」

「いいじゃない。便秘じゃなくてもスッキリするわよ。それにしても、そんなに嫌がるなんて、よっぽど浣腸が嫌なのね。

そうと分かると余計にしてやりたくなるわ。佳奈美さん、これも償いだと思って、恥ずかしい目にあいなさい？」

「昨日、やったじゃない。これ以上、まだ私を辱しめ

る気なの？　もう、もう嫌よ……二人に、そうだ……
鏡子と美那子にやればいいじゃない。なんで私だけ
こんな目に……」

「辱しめとはなによ。ええ？　医療行為をするだけじ
ゃない。人がせつかく診断してあげたのに。
いいわ、そんな事を言う子には、たっぷり浣腸してあ
げるわ。少し強めにね……」

「……………な……なんて事を言うのよ。浣腸、浣腸っ
て……最初からそのつもりで……そうなんですよ
う？　磯江さん……」

我を忘れて必死な佳奈美。暴れれば暴れる程、その
姿に興奮していく磯江。

「そうよ、まあ今日は優美子に任せていたからね、ど
んな事をするのかは知らなかった。

けどまさか浣腸だなんて、恥かしいわね。今度は四人の同じ女に見られちゃうわよ、肛門を。

さらに浣腸、フッフ、そのあとはどうなるかしら。ブリブリ、臭いのが、いっぱい出ちゃうわね？ 恥かしい」

「……ああ……あああ……嫌よ。絶対……いや」

「ほら、暴れないの。情けないわね。三十にもなるいい大人が、浣腸されるぐらいで何よ！」

二人の看護師により、引きずられながらベットに向かう佳奈美。唯一、自由な両足をばたつかせている。

表情は青ざめ、目を大きく開け、叫び声を上げている。

「い、いやよ！ 離して！ いや！ いや！ いやあ！」

優美子磯江は、激しく動かしている佳奈美の両足を片方ずつ持ち、動きを封じた。両手両足を一人ずつに持たれ、四人で運ばれる佳奈美。診察ベットに寝かされ、これから最高の陵辱が始まろうとしていた。

第四話

病院の一室から響く女の悲鳴。まるで幼い子供が、駄々を捏ねるような叫び声、泣き声である。

ベットに無理矢理、仰向けで寝かされた佳奈美。だが、大人しくならず、いまだに暴れていた。そこに磯江が、しびれを切らし強引に押さえつけ、いつもの脅しにかかる。

「あんたね、いい加減にきなさい。自分の立場を忘れたの？ 不倫写真、肛門写真、いいの？ ばら撒かれても。ええ？ どうなの？」

「ひ……………そ、そんな……………」

「なによ、被害者ぶる気？ 人の人生を無茶苦茶にしといて、なにがやめてよ。私が味わった屈辱に比べれば足りない位じゃない。たかが、浣腸くらいで償える

んだから。それとも痛いのがいいかしら。ムチで血が出るほど叩く、お腹をまた数発、殴られたい？

あ、今は診察ね。じゃあ、陰毛を全て剃ってやろうかしら。そのあと肛門に注射をしてやろうか？」

その言葉を聞き、大人しくなる佳奈美。両手で顔を塞ぎ、泣きながら喋りだした。

「……わ、分かったわよ。だからそんな酷い事言わないでよ……」

「なにが分かったの。はっきり言いなさい。なにをされる事が分かったの。あなたのどの場所に、なにをされるのが分かったの？」

「わ、私の……お尻の……穴に……かん、かん……ちようを……あああ……」

「どう？ 昔私をさんざん、いじめていたけど、少しはいじめられる立場の気持ち理解出来た？
何度か私も泣いた事もあったけど、あんた達三人は、その姿まで笑いものにしたわよね？ 今の現実は、天罰と思ってどんな事でも受入れなさい」

完全に、佳奈美を屈服させた磯江。ベットの上では、ビクともしない。その横に優美子が現れ、陵辱の準備をする。

「さあ、佳奈美さん。分かったでしょう？ 磯江を怒らせるような態度はしないでね。じゃあ、いまから浣腸しますから、そのまま横向きになってお尻をしっかり向けてね？」

鈍い動作で横向きに寝て、足を折り曲げる。

「なにしてるの。あんた浣腸される気あるの？ それ

じゃ肛門が全然見えないじゃない。もっと、膝を曲げて、胸に付けるような感じよ。海老みたいに、お尻を突き出しなさい」

磯江は自分から行動せず、佳奈美、本人に辱しめを受ける準備をさせる。自らやらせる事により、これから行われる羞恥行為を認識させるのである。

「そう、そう、そんな感じよ。じゃあ、お尻出しましょうね」

佳奈美のスカートを捲り上げ、現れた下着。パンティーストッキングを先に膝まで下ろし、次にパンティーに手をかける。

その瞬間、佳奈美の体が震え出す。その動きを見て、磯江の悪戯心が、いやらしい問いかけをする。

「どうしたの、佳奈美さん。何か文句でも？ さっき

納得したばかりよね。いいんでしょう？ 浣腸しても……」

「……は……い……」

「そう。……じゃあ、脱がすわよ。みなさん、今から私の人生を滅茶苦茶にした女のお尻の穴を、しっかり見てやりましょう」

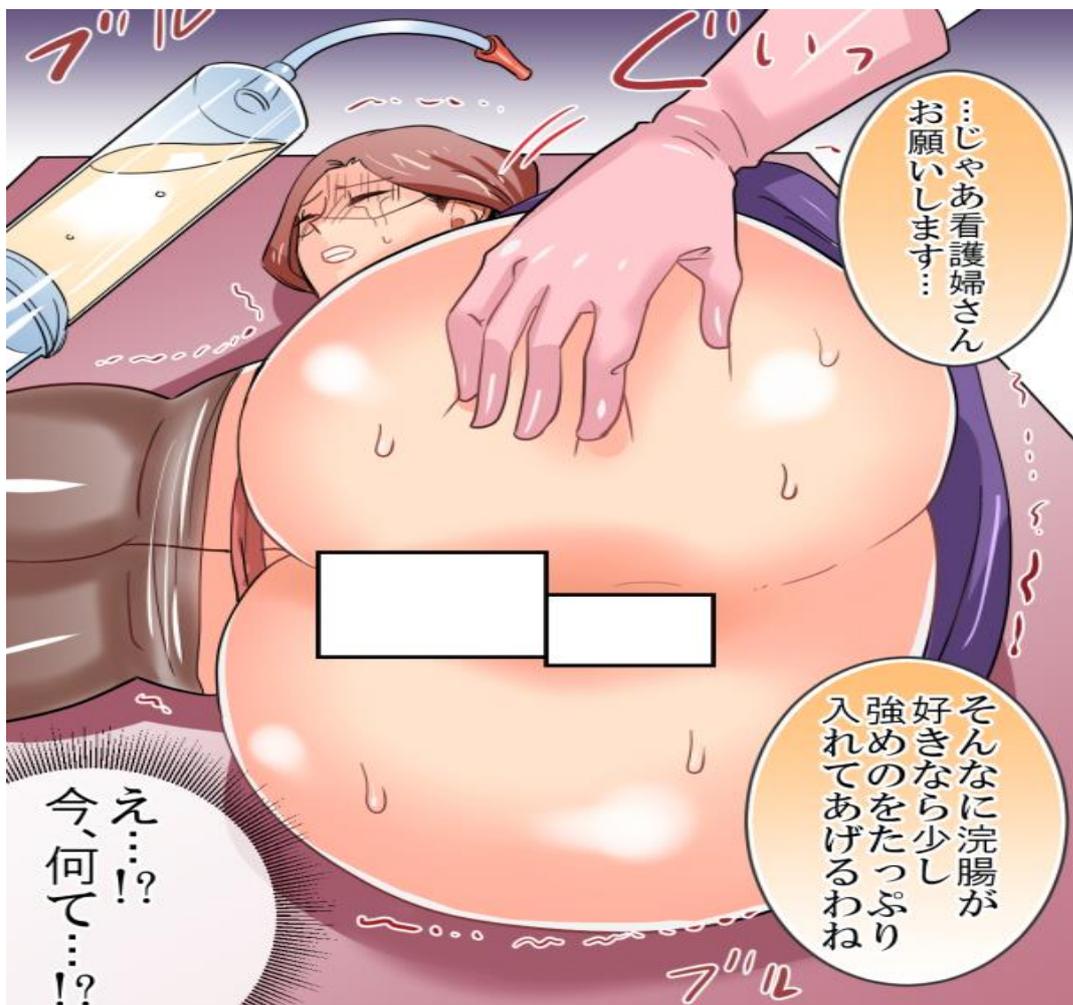
一気に脱がされたパンティー。充分に開いている双尻の真中に、変色した濃い肛門が現れていた。羞恥の緊張のせいか、真中の小さな穴に、シワが集まり強く閉まっている。

「どう？ 佳奈美さん。大勢の前で肛門を露出した気分は？」

恥かしさのあまり、赤面した顔を隠し、ベットに伏

せている。その姿に、四人の女達は快感と興奮を感じる。

「なかなか綺麗な肛門ね。多くの患者の肛門を見てきたけど、さすが普段、美貌には気を使っているだけはあるわね」



「どう、佳奈美さん。そうやってお尻を出して、今から浣腸されるのを待つ時間って、恥かしくてたまらないでしょう。

若い綺麗な子は特に恥ずかしがるけど、私達、看護師はそれが楽しみなの」

「そうよね、本当。浣腸ってする方はいい事ばかりね。特に若い女や、高慢そうな女なんかはね。

若い子は羞恥心で、震えている姿がいいし、高漫な女は肛門を見てやった時に悔しそうな表情をするのがいいのよね」

「……な、なんて事を……この人達……こんな人達が……看護師なんて……」

佳奈美が尻を露出し、そこに感じる空気の感覚。自分の肛門を見ながら話される悪魔の会話。

しばらく観察され、からかわれた後、看護師の香味が

肛門の真中に、人差し指を当てて、そこの皮膚に擦り付けていた。

「……ああ……ああっ……」

僅かにもれる羞恥の喘ぎ声。その姿を堪能する女達。しっかりと揉み解した指の臭いを嗅ぐ香味。

「臭いわよ、佳奈美さん。こんなに臭い肛門は久しぶりね」

「本当？ 私も臭ってみるわ」

優美子も、香味と同じく指を肛門に直に当てて、臭いを確認する。

「本当ね、すごい臭い。佳奈美さん、あなた、外見だけじゃなく中身も綺麗しないと」

もはや、なにも言い返せない佳奈美。同じ女に、他人に見られる事などめったにない場所を、徹底的に観察され、臭いの事まで指摘され、情けなさで震えている。

そうした女を見れば見るほど、女虐心が高揚する四人の心理を知らない佳奈美。

「こんなに不潔な肛門だと悪い虫がいるかもしれないわ。香味、まだギョウチュウ検査のシール、あったわよね？ 持ってきてよ」

「はい。佳奈美さん、あなた肛門が汚いから、念の為、ギョウチュウ検査します。知ってるわね。子供のころやった事あるでしょ。お尻にシールを貼るやつよ」

「……………ギョウチュウ？ ……ど……どこまで……そんな、どこまで、うう……」

「なに？ 文句あるの？ 私の親友が好意で言ってくれているんだからね」

ベットのシーツに顔を深く埋めて、なにも話さない佳奈美。どんな事をされても抵抗は出来なさい。

「持ってきたわよ」

ギョウチュウ検査用のシールを持ってきた香味。同時に翔子も、浣腸をはこんできた。そのシールを、優美子を取り出すと、佳奈美の耳元まで持っていき、シールを剥がし、その粘着音を聞かせる。

「さあ、まず最初にこのシールで、検査します。肛門の力を抜いてね」

ぽっくりと、中心の穴が僅かに開き、小さな暗い空洞が見えている肛門。そこに向けて二重丸が書かれたシールの中心を押し付けた。

その上から、指で押さえつけ、圧縮で変形された肛門皮膚を見て女達は楽しむ。時折、笑い声が響き、佳奈美の羞恥心をもて遊ぶ。

そして、剥がされてゆくシール。ゆっくりと時間を掛けて剥がされ、そのシールに合わせて、肛門皮膚も引っ張られる。さすがに耐えられない辱しめを受けた佳奈美は、押し殺した悲鳴に似た泣き声を上げていた。

「もう一枚あるわ。磯江、してあげなさいよ」

磯江が、検査シールを受け取ると、優美子の時の丁寧な行為とは違い、力強く押し付けた。その上から、人差し指で、肛門の真中の穴に押し込むようにおさえつける。

「ああ……ああああ……ちょっと……」

肛門内部に少し侵入したギョウチュウシール。それ

を剥がしにかかる磯江。敏感な皮膚を無視し、早いスピードで一気に剥がしてしまった。驚いた佳奈美は体を激しく動かした。

「ごめんなさい。なんか苛められていた記憶が蘇って、少し意地悪したくなったの。どれどれ、あ、ちょっと見てよ、みんな。

シールにウンコが付いてるわ。傑作」

「わあ汚い。やっぱり溜まってんじゃない」

「本当、やっぱり浣腸ね。さあて、磯江。どうする。適当に数種類、持ってきたわ」

ワゴンに並べられた数種類の浣腸。ガラス式から、一番小さいイ○ジク浣腸。しばらく眺める磯江。

「これがいい。これを三個入れるわ。この長いノズル

が気に入ったわ」

「ディ○ポ浣腸 60ml ね。それを三つも入れるの？
かなりつらいわよ。二個目位で漏らすかもしれないわ
よ？」

「大丈夫よ。平気、平気。これは治療と同時に、佳奈美さんが悪い事をした償いなんだから。普段よりちょっと、お尻の穴を強く閉めればいいだけのこと。
良かったわね、佳奈美さん。こんな事ぐらいで、いまままで苛められた私の気持ちを、少しでも解す事が出来るんだから」

何も言わない佳奈美。さっきからまったく喋らなくなっていた。そこに磯江が、ベットに顔を埋めている佳奈美の髪を掴み、顔面を持ち上げる。
その顔は、羞恥の診察やこれからのさらなる陵辱の為か、顔全体が真っ赤に染まっていた。目からは涙のあ

と、鼻水も垂らし、埋めていたベッドのカバーには水分が吸収されている。

「汚い顔ね。なに泣いてるの。まったく、ベッドもこんなに汚すなんて」

「ひい……うう……もう……やめて……もう……こんな事」

「いい顔ね、佳奈美さん。そうやって後悔しなさい。自分がやった事をね。男ならこのへんでやめてくれるかもしれないけど、女にはきかないわよ」

そう言うと、ディ○ポ浣腸を手に取り、先のキャップを外す。容器を握り、中身のグリセリンが少量飛び出す。その光景を恐怖の表情で見つめる佳奈美。

「さあ、入れるわよ。この長いノズルを奥深く入れやるわ」

「磯江、その前にワセリンで解した方がいいわ。翔子、肛門に塗ってあげて」

翔子が中指にワセリンを付け、佳奈美の肛門に塗りだした。円をかくように、周辺に塗りこみ、時折、真中の穴にも塗り、そこに向かって押し込もうとする。

「大分、解れたわ。佳奈美さん、ちょっと指入れるわよ」

「……うう……ああ……うう」

生まれて初めて経験する感覚。腸内部からの振動は、猛烈なおぞましさと、若干の便意を感じさせる。十分に括約筋を解され、抜かれた翔子の指。普段は外部からの進入などないためか、佳奈美の肛門は指が抜かれた直後、イソギンチャクのような動きを見せていた。

「準備は OK ね。さあ覚悟はいい、佳奈美さん」

その言葉を言った瞬間、長いディ○ポ浣腸のノズルを一気に挿入してしまった。細い硬質な感覚があった。僅かな異物感よりも、恥かしさで平静など保てず、泣き声をあげながら体をよがらせていた。

「ほら、動かないの。お尻が少し引いたわよ。もっと突き出しなさい」

「うう……うう……」

ディ○ポ浣腸のノズルに表示されている適正進入部分の赤印まで、肛門内部に入れ、一旦止めた磯江。そこからさらに、ゆっくり少しずつ、まだ挿入していく。佳奈美は自分の体の内部に入ってくる異様な物に抵抗を感じていたが、それよりもいつ終るとも分からぬ浣腸ノズルの挿入に、恐怖を覚えていた。

「……うう……い、磯江……さん。もう……もう充分……やめて……入れないで、気持ち悪い……いや……もう、お願いよ……」

「あら、ごめんなさい。ちょっと入れすぎたかしら」

すると今度は挿入したノズルを取り出す。腸壁の当たるノズルの感触は、言葉では言い表せない。一度、外部直前まで抜かれたノズル。しかし磯江は再び、肛門深くまでノズルを挿入してしまった。細いノズルを全て入れ、グリセリンが入った容器しか見えない程、肛門内部に進入させた。その瞬間、佳奈美の絶叫が響く。

「……やめて……お願いよ……もう……ああ……」

「ふう、佳奈美さん。あんまりいい声で泣くからもう

私のアソコは濡れてるわ。サドの快樂がこんなに感じるなんてね。それにしても浣腸って面白いわね」

「磯江、そろそろ浣腸してあげたら？ そんなに焦らしたら可哀相よ。それに私達もやりたいんだからね」

「そうね。さあ、佳奈美さん。お待たせ。今からお薬を入れますからね」

ゆっくりと浣腸容器を握り、中身のグリセリンを注入する磯江。必要以上に肛門に入れられたノズルから、噴出される感触を感じ、羞恥、悔しさや情けなさで、また涙する佳奈美。

半分近くまでグリセリン液を入れられると、便意が襲い、佳奈美の表情に変化が現れ、ベッドのカバーを強く握り、眉間にシワを寄せて目を閉じていた。

「うう……ああ……いや……うううう……あああ」

口から漏れる嗚咽と合わせて、体全体を震わせる。丸めていた体も、浣腸の不気味さで思わず体を反り返し、割開いていた双尻が閉まった為、肛門が隠れて、尻の割れ目からノズルが真中に刺さっている光景がみえた。

「なにしてるの？ 暴れないの。まだ半分しか入れてないのよ、情けないわね。ほら、お尻が閉まって肛門が見えないわよ？」

佳奈美の尻を叩き、腰に手を伸ばして引っ張り、再び尻が開かれ浣腸が刺さった肛門が現れた。そしてまた、容器を握り潰しグリセリンを腸内に送る磯江。60 ml を最後の一滴まで残さず注入してしまった。

そして肛門からノズルを抜き、ノズルに付着している汚物を確認する。奥深くまで長い時間、腸内部に入れられていた為、所々に白色のノズルは茶色で染めら

れている。普段は浣腸などしない佳奈美は、当然の事、グリセリン 60ml という量は便意を起こすには充分すぎる。

強烈な便意に耐える為、肛門は中心にシワを集めて、出口を必死に閉じている。そこに遠慮なく、磯江が指を当て、マッサージを行う。

「……………や、やめて、いや……………もう……………お願い……………
トイレ……………我慢出来そうに……………」

「なに言ってるの。あと二個残ってるのよ。今の量と同じ浣腸を二個するのよ」

「……………な……………無理よ。……………やめて……………あ……………駄目。もう我慢が……………」

あまりの便意にベットから起き上がりトイレに向かおうとする佳奈美。だがすぐに押さえつけられ寝かされてしまう。

看護師と磯江で暴れる佳奈美を今度はうつ伏せにし、尻の割れ目を左右に開き肛門を露にする。そこに優美子が浣腸を持ち、閉まった肛門に無理矢理ノズルを入れようとしている。

「……や……やめて、やめてったらちょっと……いい加減に……酷い……無理よ無理だって……本当に……誰かああ！」

「そんなに暴れる元気があるなら大丈夫よ」

泣きながら叫ぶ佳奈美を無視して、優美子は容赦なく肛門にノズルを差し込んでいった。

第五話

「無理だって、やめて。抜いて。抜いて……あ……あ
あ、待って、待って入れないでよ」

磯江、翔子、香味三人の女にベットにうつ伏せに押さえつけられ、尻の割れ目を左右に開かれ、そこに向けて優美子が浣腸を施していた。

すでにグリセリン 60ml もの量を注入されている佳奈美。腸内は刺激され便意もかなり起こっているが、そんな彼女を無視し、さらに 60ml の浣腸をされる。

優美子は、時間を掛けず一気に浣腸液を注入した為、佳奈美は肛門のすぐ直前まで迫る排泄物とグリセリンを、また奥部に押し戻すような感覚に鳥肌をたてていた。

「はい、終わり。どう？ 気持ちいい？」

佳奈美はピクリとも動かなくなり、震えて必死に便意と闘っているのが分かる。額からは汗が出ており、歯を食いしばる。

その無様な姿を、一旦佳奈美の元を離れて見つめる女達。すでにディ○ポ浣腸を二個もされ、耐えがたい便意を催している。

「……い、い、磯江……さん。我慢で……きそう……に」

必死で喋る佳奈美。しかし磯江は最後の浣腸の準備をしている。そして、優美子は聴診器を持ち出し、佳奈美の腹部に当て、排便をあおる音を聞いて、楽しんでいた。

「苦しそうね佳奈美さん。お腹が痛いでしょう？ その痛みをじっくり味わいなさい。私はあなたに何ヶ月も酷い事をされたんだからね」

「……あ、謝る……から……だから……あ……出る…
……お願いよ。トイレ」

……ブリュ……

僅かに鈍い音が、佳奈美の尻から聞こえた。

「なに？　なんか変な音が聞こえなかった？　ああ
……磯江、この子少し漏らしてるわよ」

佳奈美の尻から僅かに、透明なグリセリンが漏れて
いた。それを確認した磯江は、怒りを露わにし、佳奈
美の尻を片手で力強く叩いた。

「……い……痛ったな……なにするのよ」

「誰が出していいって言った？　なに勝手に漏らし
てるの？」

「……な……だからトイレって……ひい……」

続けて二発、三発と佳奈美の尻を叩くと、室内に肉を平手打ちする音が響く。

「あんたね、あんまり私をなめないでね？ あんたがウンコがしたくて限界に近いのは承知よ。それを我慢させる事で、いままでの行いを償わせているのよ。それをなに？ 全部浣腸を入れてもないのに、途中で、しかも二、三分しか経ってないのに漏らすなんて。あ、そうか。そうっやって反抗してるのね？ いいわよ、ここは病院だから沢山、浣腸があるわ。あと一個が私の気分しだいで、あと十個に変わるわよ？」

「……十……十個？ ……ゆ……許して……もう…
…我慢するから」

そんな討論を重ねる間も、佳奈美の肛門から注入さ

れたグリセリンが、どんどん排便を要求している。

それは腹部から音として現れている。佳奈美の肛門は時々、膨れ上がったたり、内部から大量の汚物が押し寄せているのが分かる。

それを、括約筋の力で必死に我慢しているのを、シワが中心に向かっている肛門が物語る。そこに、トドメをさすように、看護師翔子が、浣腸を行う。

「あ……あああ……」

耐えがたい感覚と、腹部の苦痛。強く握り締めているシーツは、捲れて体をくねらせてもがき苦しむ。60mlのグリセリンを三個、想像を超えた便意。

「……だ、だめ………で……ちゃ……うう……」

ブリュ……ブリュリュウウウ……

またしても肛門から、グリセリンがこぼれだす。今度は透明ではなく若干、茶色が混じっていた。その瞬間、再び礒江の平手が、尻肉を襲う。

「佳奈美さん、なにしてるの。さっきの言葉忘れたの？」

「……だ……って……我慢……で……きそうに……」

「本当、あんたって駄目ね。我慢しなさい。いい？ 今度漏らしたら許さない……」

ブリュ……

礒江が脅し終わらない内に、佳奈美の肛門から数滴のグリセリンが、尻肉を伝わり落ちる。その行為に怒りを露わにした礒江。

透明な液体がついた閉まりきった佳奈美の肛門に

向かって、中指を根元まで一気に押し込んだ。

「あ……あああ……あああ」

大声で悲鳴を上げる佳奈美。いきなりの体内への指の侵入に、思わずベットで暴れる佳奈美を優美子達は押さえつけていた。

「出すなって言ってるのに、呆れた女ね。シーツにウンコが少し付いてるわよ？ 汚いわね。少し辛い目に合わせた方がいいみたいね、佳奈美さん。お仕置きよ」

「お、お仕置きって……も……もう十分に……十分に遭ってるじゃないの。あああ……ああああ」

肛門に深く進入した礒江の指が、上下に激しく出し入れされた。激しすぎる腸内の刺激に声を出さずにはいられない。

体全体が痺れ、脳天まで電流が走るような感覚。

「やめて……分かった。私が悪かったから……だから……もう……」

泣きながら、必死に頼む佳奈美に満足したのか、礒江は一旦指を止めていた。つい半年前までは、いじめに遭い脅えていた女に、満足のいく仕返しをした事で、もはや第一の復讐はやり遂げていた。

しかし、礒江は予想もしなかった快感を感じ、サドの虜になり、羞恥心でボロボロに崩れる同性の姿を堪能していた。

佳奈美は強制的に起こされた自然現象を、辱しめられて、さらに操作までされた事で屈辱感に溢れていた。いや、今の佳奈美は経験した事のない便意に、苦しめられている。

それから数分の時間が流れた。

「……うう……はあ、はあ、い、いつまで………我慢すれば……お願い……よ」

「まだ三分位よ。これくらいじゃあ、私が長い間受けた苦痛と同等じゃないわね」

「……がまん……で……出来な……もう………助けて……」

しばらく無言で、グリセリンに苦しむ一人の女を見つめる磯江達。もはや限界に足している佳奈美。磯江の指が肛門に埋まっていなければ排出しているはずである。

いつ排便の許可をもらえるのか想像が付かない佳奈美は、無限に続く地獄を耐えるしかなかった。

一分が何十分何時間と感じる。佳奈美の肛門に埋められた指からも僅かに透明な液体が滴っており、腹部

からはグリセリンに犯された腸内が起こす音が鳴り響く。

「……おね……がい……よ、もう許して……下さい。た、えられ……ない。痛いのお腹が……痛い。ああ……もう許して。トイレに……なんでも言う事を聞くから、許してよ。うう……ああ」

「当然よ。あなたはもう奴隷も同然。これからは私、いえ私達の言う事はどんな事でも聞くの。逆らうと写真はもちろん、今味わってる以上の苦痛や恥かしい事をするからね？」

「……わ……分かったから……トイレ……なんでも……聞きますあ……から」

磯江は、佳奈美の肛門に指を差し込んだまま体位を変えさせた。仰向けに寝かせ、下半身を折りたたみ、足首を肩に付けるような形、つまり、赤ん坊がオシメ

を取り替えるような姿になっていた。

僅かな体位の変更でも、自分の肛門に指を入れられている事と、体内への大量なグリセリンのせいで、苦痛が倍増される。惨めな姿にされた佳奈美、性器と指がささった肛門が、はっきりと見える。そこに優美子が、大き目のシビンを持って来た。

「佳奈美さん、もうトイレは無理よ。動く事なんてとても出来ないわ。だから、ほら、このシビンにしましようね。本当はオシッコをする物だけど、一番大きなのを持ってきたから大丈夫よ」

「……………し……し、……シビンですって……そんな……酷い。全部……見られる。排便を。その時に出るオナラや、そのあとの便も……………いや……」

「不満そうね、佳奈美さん。そりゃそうか。なんたってウンコする姿を見られるんだからね。なんならトイ

レに行く？　ここから歩いて五分はかかるわ。でも多分、その状態じゃ廊下に汚い物を撒き散らすわね」

かつて、いままで生きてきた中でこれほどの羞恥があったかどうかと佳奈美は考えていた。

人間の最も見られたくない姿を、無理矢理、同性の前で行うなど、仕返しにしても残酷すぎると思った。

自分では到底、コントロール出来ない強烈な便意。泣きながらも、ここで排便するしかない現実。

「もう限界ね。指にウンコがあったてるのが分かるわ。優美子、準備はいい。指を抜いたらすぐに出しちゃおうわよ？」

「はい。いいわよ、いつでも」

磯江、優美子、看護師、これから佳奈美が起こす地獄の羞恥の結果に期待をし、胸を高鳴らせていた。腸内を浣腸で充分すぎる時間刺激されたせいで、派手な

排便になる事は看護師である事から知っている。

他人にその姿を始めて見せる佳奈美が、泣き崩れ落ちてゆく事を想像すると、たまらない何かが体を駆け抜ける。

「さあ、指を抜くわ。思い切って出しなさい」

そう言って磯江が指を肛門から抜き、すぐに優美子が肛門にシビンの口をピッタリ密着される。シビンは透明で、大き目なサイズの為、肛門の細かい動きまで充分観察出来る。指が抜かれた直後の肛門は、中心の穴に向かって引き締まっている。

その部分が内部からもりあがったと思うと、茶色の液体が飛び出した。シビンのガラスに勢いよく当たり、見る見る内に溜まっていく。

少しずつ排出されていく便が混じったグリセリン。しかし次の瞬間、肛門の内部が見える程開かれ、ものすごい爆音が聞こえた。

……ブブブ……ブリュウウウウ……ププ……ブリ
ブリビリイイイ……

「いや……お願いよ……見ないで……見ないで」

液体が流れ出し、続いて固形物が飛び出す。長時間のグリセリンの効果である。それは大量の便が物語っていた。

次々と止まる事のない排便が続き、肛門から飛び出す大便グリセリンと室内に響く放屁音。あまりの羞恥心で、佳奈美は両手で顔を隠し泣き叫んでいる。両手から溢れ出る涙。

「……ううう……ううアアアア……ああ」

ブリュ……ブリュウウウウ……

自分ではコントロールが到底出来ない排便を、自然に任せて行うしかない。肛門から流れ出た物が一旦、止まったかと思うと、すぐにまたドロドロな便が出て来る。それが終わると放屁が鳴り響き、終ることのない無限の羞恥地獄を味合う佳奈美。



「いっぱい出たわね。相当、浣腸が効いたようね。それにしても臭いわね」

大量の排便で、室内は激しい悪臭で覆われていた。迫力ある排便と、佳奈美が受けた生涯残るであろう羞恥の精神的なショックに犯された姿を見て、満足した四人の女。

「見てよ、シビンから溢れるほどウンコが出たわ。まったく、もっと上品に出来ないの？ ブリブリ、オナラもでかい音たてて、あ、まだ出てくるわ」

「佳奈美さん、同じ社宅の時はいつも上品ぶってたああなたが、こんな臭い物をひりだすなんてね、それにしても本当臭いわ」

「……うう……ううう……もう言わないで……うう

う……ううう」

ブブ……ブブ

「なに？ まだ出るの？ 何が便秘じゃないよ。これほど溜めといて」

ディ○ポ浣腸の三個注入に加え、長時間の腸内への薬液浸透は相当な効果をもたらす。排便を始めて数分たつが、いまだに若干の便と放屁音が途切れ途切れ出していた。

佳奈美は自分の情けない排便姿と、尋常ではない大量の排便を強制的に引き起こされた現実に、気が狂いそうだった。

しかし、ついさっきまでの地獄のような排便欲求から逃がれられ、すべて出し切った悪魔のグリセリンの開放感に、快感に近い喜びを感じている自分が悔しく、涙が再び滲んでいた。

「ねえ、記念写真を撮りましょう。デジカメラ持ってきたわ」

「いいわね、ほら、みんな集まって」

「……しゃ、写真……イヤー……やめて、やめて……
お願い」

「やめて、お願い、フフフ、佳奈美さん、私も何度そうやってあなた達三人に頼んだかしらね？ 佳奈美さん、いじめってやるほうは楽しいわね。

いじめてる人が、泣けば泣くほどいい気持ちになるわ。なるほど、これは病み付きになるわ。だから、あれほど酷い事を私にしたのね」

「……………許して……謝るから……他の事だったら……」

「他の事ですって？ そんな口から出任せを……そう、だったら今あんたが出したこの臭い物を全部、飲み込みなさい！」

「……………ひ……………酷い……………そんな事……………出来る訳……………」

「出来ないの？ じゃあ写真ね」

諦めた佳奈美、それから数枚の写真を撮られてしまった。強制的に起こされた排便を行った直後の肛門、収縮を繰り返す奇妙な動き。

連続シャッター音が聞こえるが、もはや抵抗の気力などなくなっていた。

「ほら、あんたが出したウンコ入りのシビン、これを持ってカメラに向って笑顔で笑って」

佳奈美が出した便がたっぷり入ったシビンを手で片手に持たされ、カメラのシャッターが押される。自分の体から出てきた物とはいえ、佳奈美はすさまじい激臭がする大量の排出物に鼻が曲がりそうだった。

「佳奈美さん、実は内緒でビデオにも一部始終を撮らせてもらったわ。記念にダビングして、あなたにも上げるわね」

駄目押しの一言。そこまでやるかと言う恐ろしい羞恥地獄。自分の肛門から出てきた排出物と、排便時に起こる放屁音までも映像として撮られた事に、これからの未来に絶望する。

「さあ、お尻を拭くわ」

「……………ううう……………」

優美子が佳奈美の汚れた肛門を拭き取る間、看護師達は汚れたシーツ部屋の換気をして、汚れた室内を片付ける。

佳奈美は死んだように横たわり、まだ腹部に感じる違和感や若干の腹痛を感じていた。そして、その隣に来た磯江はゆっくりと口を開く。

「どう？ 佳奈美さん。悪い事をしたらいつかは自分に帰ってくるのよ。子供の頃に習ったでしょう？
でもこれだけで終らないわよ。まだまだ、あなたにはこれから償いをしてもらうわ。じゃあ、まずこれから残りの二人の事を詳しく聞くわ。正直に話さないと、また浣腸地獄に合わすわよ？」

佳奈美は、完全に磯江に脅え、逆らう意識などは消えていた。昔は見下して侮っていたが、いまでは復讐に狂った磯江は肉食動物のような強い迫力を持ちえ

ていた。

第六話

優美子の病院での、佳奈美に対する羞恥責めの出来事から一週間が過ぎていた。同性に徹底的に陵辱され、心の深奥に恐怖心を埋め込まれた佳奈美は、もはや抵抗の意などはなく、絶対服従の奴隷に成り下がっていた。

一週間前、無理矢理病院に連れてこられ、そこで理不尽な診察から浣腸強制排便をさせ、死んだように横たわる佳奈美に磯江は、鏡子美那子について洗い浚い聞き出した。

恐ろしい地獄責めを受けた佳奈美は、これ以上の苦痛を逃れたい一心で、知っている事は全て話した。

——磯江の自宅

「さて、いよいよ明日ね。楽しみ」

「優美子、打ち合わせ通りにやるのよ？　でもゾクゾクするわ。美那子、あの女が泣き崩れる姿を想像するとたまらないわ。フッフ、……ちょっと佳奈美さん、まだご飯出来ないの？　早くしてよ！」

磯江の怒鳴り声に慌てて食事の用意を行う佳奈美。あの陵辱された日からは、佳奈美は時々呼び出され、磯江の身の周りの世話を強制されていた。

断ったり抵抗する事など恐ろしくて到底出来ないのは当然の事。二人の女が足を組み、タバコを吸いながら皿を食卓に並べる佳奈美を満足そうに見つめる。

「いい気味ね。昔いじめられていた人を扱き使えるなんてね。佳奈美、悔しいでしょう？　でも反抗出来ないでしょう？」

屈辱感にまみれて震えながら、食事の仕度をする佳奈美。震える手のせいか、運んできた磯江のコーヒー

を、少しばかり溢してしまい、磯江の手にかけてしま
う。

「熱っ！ ちょっと、なにやってるの？」

「……ご、ごめんなさい。つい、うっかりして……」

「なにやってるのよ。あんたね……浣腸するわよ？」

「や……やめて……謝るから……お願い……」

浣腸に異常なまでの脅え方をする佳奈美。あの病院
での出来事から二日後、再び優美子の行き着けの SM
店で浣腸を強制されていた。

その他、レズプレイから SM プレイなど、変態行為を
何度か味わわされたあと、女の手で絶頂まで迎えさせ
られていた。

震える佳奈美の脳裏に数日前の悪夢が蘇る。

「そうよね、この前の浣腸は辛かったでしょう？。ガラス製浣腸器 100cc のグリセリンだものね。もう、あんな苦痛はこりごりでしょう？」

「でも案外楽しんでいるのかもしれないわ。だって人前で、平気でブリブリとウンコを撒きちらすのよ？ところで佳奈美、今日は私が言った事をしてきたのかしら？ 見せてちょうだい」

佳奈美は、真っ赤な顔をして後ろを向くとズボンとパンティーを脱ぎ、形のいいヒップを丸出しにした。そして、その左右の尻肉を掴むと、震えながらゆっくりと割り開いていく。中心に現れた肛門。しかしそこには排泄物が付着しており、半分は茶色で覆われていた。

そう、磯江が佳奈美に要求したのは朝の排便後、肛門を拭かずにそのままの状態で来いという。

恐ろしい女達に排便欲求がなかったと言う理由は

通らないだろうと思い、屈辱にまみれ泣きながらもその行為を行ってきたのだ。

磯江のアパートに来るまで一歩が辛く、その度に肛門に感じる不快感や痒みが耐えがたいものだった。

「やだ、汚い。本当に拭かないで来たのね。肛門がウンコまみれじゃないの」

「佳奈美、あなた冗談って言う事を知らないの。まさか本当にするなんてね。しかも食事中に、なんてものを見せるのよ」

「……自分で言っというて……酷い……もし拭いていたら酷い事をするくせに……」

頬を伝う涙を拭く為、片手を尻肉から離れた瞬間、磯江が激怒する。

「誰がやめていいって言ったの！」

「……ヒ……ごめんなさい。……」

すぐに自分で尻を開く佳奈美。その行動を見て、礒江は確信する。もはや佳奈美は自分に従う奴隷だと。

半年前、爆発した抑えようのない怒りに、復讐を計画し実行に移した。

その結果、第一段階は大成功に終り、満足した礒江。

自分のやった事に後悔など感じず、それどころか満足と快楽に溺れる。同性を辱しめ、苛める事がこんなにも興奮するとは新しい発見だった。

結婚していた時の暇な主婦では味わう事の出来ない楽しみ。それを考えると、今の現実も悪くはないと思っていた。

「優美子、明日の再確認よ。美那子の旦那は出張で今日から当分は不在よ。だから明日の夜に行動するわ。

佳奈美さん、出張の件は間違いないわよね？」

「……ええ……そうよ」

「そう、もしウソだったら浣腸よ。ま、大丈夫でしょうけどね。美那子のお風呂場にも盗聴器を付けてきてくれたし」

「でも、なんでわざわざ、お風呂場に盗聴器なんて付けたの？」

「フフフ、今回は美那子が入浴中に侵入するの。その方が安全よ。いきなり侵入して大声出されたくないし。まあ、いい所に住んでいるから防音は大丈夫だろうけど。それと何より裸にする手間が省けるし……
まっ裸の美那子が私達の侵入で啞然とする顔も見たいわ。だから盗聴器で美那子がお風呂に入ったのを確認をして侵入するのよ。合鍵も佳奈美の協力で作った

しね。

佳奈美、もうあんたも同罪よ。私達と同じ犯罪者ね。何かあった時は道連れよ。それが嫌ならこれからも協力してね？」

「なるほどね。しかし驚くでしょうね。いきなりの侵入者、それが昔苛めていた女なんて」

高鳴る鼓動、これからの復讐に期待を抱える磯江と優美子。もはや当初の復讐計画とは違い、快楽を求める事が最優先とされていた。

磯江にとっては 三人を痛めつければいいと思っていたが、その結果、いままでに経験したことのないような快楽を感じるには自分自身も驚いていた。

それはターゲットにされている三人にとっては地獄である。最初の佳奈美が受けた陵辱、これは一番恨みを持っている鏡子に行うレベルの内容だったが、被虐行為がエスカレートした事で、佳奈美には酷い形に

なってしまった。

磯江の止まる事のないアブノーマルな思考や行為、またそれを心地良いと感じる気持ち。

このことから、最後のターゲットである鏡子は恐らく、この世のものとは思えぬ羞恥地獄を味わわせられるに違いない。二人は、明日の計画の打ち合わせと、美那子を苦しませる為の道具の再確認を、不気味な笑顔で行っていた。

佳奈美はそんな二人に恐怖を感じると共に、最初のターゲットにされた事を不幸中の幸いだと思っていた。

——二日後 PM20 : 00

美那子三十二歳。エリートの子と六年前に結婚。子供はまだいない。彼女は今、自宅の浴場で疲れを癒している。夫は昨夜から海外出張、三ヶ月は帰ってこ

ない。その間、どのよにして過ごすか考えていた。

半年前の磯江へのいじめなど、すでに頭の中にはなかった。美那子にとっては、一時的なとるに足らない出来事。ただ、自分より年下で、美しい女が気に食わなかっただけ。最初のちょっとした事から、磯江への日々のいじめが過激になり、最後は一人の人間の人生を無茶苦茶にしてしまったが、その事に罪悪感もなくあれから何気ない日々を送っていた。

「気持ちいいわ。やっぱりお風呂は最高ね」

普通よりは大き目の浴場。大人三人で入ってもなんとかなりそうな広さ。

——ガチャ

「なに？ ……なんか音がしたような」

僅かな物音がしたように思えたが、気のせいだと、気にも止めなかった。この時すでに二人は、美那子の自宅に侵入していたのだ。

合鍵でドアを開け、再び鍵をかける。

「優美子、こっちがお風呂場よ。私、前に来た事あるから詳しいのよ」

「そうなの？ フフフ、間違いなくお風呂場にいるのね。まってなさい。たっぷり恥ずかしい目に遭わせてやるから」

ガチャ……ガチャ……

「……な……なに？ 誰！ 誰よ！」

今度は聞き間違いではない。確かに物音がし、しかもバスルームの扉を開けようとしているものがある。

「ど、泥棒？ ……そんな……鍵をかけといたのに」

浴槽で身を縮めて脅える美那子。他人の侵入で恐怖を感じるが、なにより今自分の姿は素っ裸、あまりにも無防備すぎる。

「だ……誰よ！ 今すぐ出て行きなさい。大声を出すわよ。ここには、お金なんてそんなに置いてないわよ」

必死の美那子の声に対し、二人の女の笑い声が聞こえた。

「……な……女！ ……女なの？」

美那子が改めて脅えた瞬間扉が開き、二人の侵入者が入り込む。

磯江、優美子は、風呂場で水に濡れることを想定してか、美那子と同じように素っ裸の状態だった。いき

なりの同性の侵入。しかも裸で、堂々と乳房と陰毛を露わにし立ちはだかる。美那子は呆然とし、しばらく沈黙していた。磯江と優美子も、浴槽で裸の美那子を確認出来た事で、第一段階の達成に満足してしばらく見つめている。

「お久しぶりね。美那子さん」

沈黙を破ったのは磯江。美那子はここで初めて磯江の存在に気付く。驚きのあまり二人の顔を確認することが出来なかったのだろう。

「……………い……………いそえ……………」

「フフフ、美那子さん。半年ぶりね。お元気？ 私の方はあれから最悪よ」

「……………な……………なんのつもり？ いきなり……………不

法侵入じゃないの！」

「そうね。ちょっと近くまで来たものだからね。半年ぶりに顔が見たくなってね。ついでだから一緒にお風呂もってね。あ、彼女は私の友人の優美子よ」

「……………な……………なにを言って？ ……いきなりそんな……………出って行ってよ。早く出て行きなさいよ……………警察に連絡するわよ！」

「あらら、お風呂位でそんなに怒らなくてもいいじゃないの。私の人生を滅茶苦茶にしたくせに。ねえ美那子さん、女同士の裸の付き合いといきましょうよ」

近づいてくる二人。いきなり自宅の鍵をこじ開けて侵入し、しかも入浴中に裸で入り込んでくるという、あまりにも常識離れした行動に怒りを抑えられない

美那子。

「ふざけないでよ！ あんたいい加減にしなさいよ。なんのつもりよ。あんた達許さないからね。警察に突き出してやるわ！」

美那子は怒りに任せ強気に身構える。だが、心の内心では僅かな恐怖を感じていた。昔苛めた女がのり込んできた意味。しかし人一倍プライドの高い美那子は、心の奥底で感じた僅かな恐怖を認める事は出来なかった。

美那子は磯江の事を虫けら同然に扱い、いろいろな方法で苛め何度も泣き崩れる姿を見ている。一時期は磯江への、その過剰な苛めが楽しく感じた時期もあった。自分より年も立場も下であるための余裕。その考えは間違いないと強く思っていた美那子は、一瞬でも磯江に恐怖を感じた自分が許せなく、それだけでも屈辱を感じていた。

「磯江、あんた覚悟は出来ているの？　ただでさえ最低な人生なのに、もっと惨めになるわよ？　もう謝っても許さないからね」

冷静な口調で落ち着いて喋りだす。流石に苛めという残虐行為をした主犯格だけあって、強気に構える。

「謝る？　私が？　アハハハ、なに言ってるのよ。なんでこの私が謝るの。バッカじゃないの？　これだから世間知らずの女は困るわ」

同じく磯江も冷静に言い返す。美那子の非を認めない言動にも取り合えず我慢し言動で対応していた。

「だ……誰に向かって……誰に物を言ってるのよ。磯江、半年前はあれほど苛めてやったのに、また泣かされたいの？」

昔の磯江とは明らかに違う態度に、思わず我を忘れて取り乱し大声で叫ぶ美那子。堂々と裸で立ちはだかる二人、一方浴槽で少しでも裸体を見られまいと、体を縮めている美那子。この時点でどちらが優位かは明らかである。

「美那子さん、それはないんじゃないの？ いつも私の事を苛めていたんだから少しは謝ってくれてもいいんじゃないの？」

「謝る……？ この私がなんであんたみたいなゲスに、ふざけんじゃないわよ！」

目の前で自分の犯した罪をなんとも思っていない女を見ても、磯江はまったく不愉快ではなかった。むしろ抵抗してくれたほうが、やりがいがある。

プライドが人一倍高い人間を陵辱するのは性的な快感である。それを知っている磯江は目の前の勘違い

女が、自分に許しを乞い、泣き出す姿を想像すると、面白くてたまらない。

「美那子さん、ゲス呼ばわりとは酷いわね。それはあなたの事じゃないの。長い間、私に酷い事をして最後は巧妙な手口で人の人生を滅茶苦茶にして……まあ、いいわ。

取り合えずお風呂から出なさいよ。私達だけ裸を見られたんじゃ不公平だわ。あなたの裸も見せなさいよ」

磯江優美子は浴槽の隅で両手で乳房を隠している美那子に近づき、掴みかかろうとした。

「な、ち……近づかないで……来ないで……」

ヒステリックな声が浴場に響き、美那子のプライドが崩れつつあった。

第七話

「……ふ……ふざけないで。来ないで……後悔するわよ」

浴場に響く声。美那子は必死になって叫ぶが効果は全くない。むしろ、美那子のそういう態度に喜ぶ磯江。

恐怖でがんじがらめにし、最後には力でねじ伏せる。このパターンが磯江のシナリオであり目的だからだ。

「ほら、暴れないの。早く出なさいよ」

美那子の手を掴み、浴槽から出そうとする磯江と優美子。必死に暴れる美那子はなかなか思い通りにはならなかったが、二対一では時間の問題。

引きずり出す形で美那子を浴槽から出した磯江。しかし、美那子は大人しくならず抵抗をする。しゃがんだ状態で磯江に掴みかかり反撃するが、格闘経験があ

る女の前では無駄な抵抗であった。

まるで大人と子供の喧嘩であり話にならない。礒江は、いつも気品高く威張りちらしていた女が、子供のように我を忘れ抵抗する姿が面白く、からかい半分で相手をするのだった。

「ほら、もっと気合を入れてかかって来なさいよ」

「ぐぐ……うう……い……礒江のくせに……あんたなんか」

ビンタを繰り返す美那子だが、その反撃は空を切る。浴室で繰り返される女の戦いはなんとも生々しい物であった。

三人共、裸で全てを露わにし闘う。今は互角に見えるかもしれないが、格闘を身に付けている礒江と SM を極めていく優美子が本気になればすぐにでも終る戦いだっただ。

一方、美那子は教養のある頭と立場を利用した方法

でしか人をいたぶった事がない為、いまのような原始的な戦法など心得ている訳はなかった。

「美那子さん、いい加減、無駄な抵抗はやめたら？
力の差は歴然よ。こっちは二人もいるんだから」

磯江と掴み合う美那子に、隣から声を掛ける優美子。
それと同時に美那子の足をはらい、そのまま彼女を押し倒してしまった。

「キャ！」

悲鳴を上げ、仰向けに尻もちをつく美那子。露わになる乳房と陰毛。それを隠す余裕など当然の事ない。

倒れた事で無防備な状態になりスキを作ってしまった。磯江は上半身を押え、優美子は美那子の陰部に片手を伸ばし強引にその茂みに向けて突き進んだ。

「……ど……どこを……触って？ やめろ！」

あまりの羞恥と屈辱に浴室全体に響く悲鳴を上げ、無我夢中で力一杯抵抗した。その結果火事場の馬鹿力という言葉通りに、美那子はすさまじい力を瞬間的に出した。

美那子の下半身にいる優美子が一番の被害を受けてしまった。

夢中で暴れる美那子は礒江に押さえつけられている腕を振り払い、足を蹴り上げるようにして、ばたつかせた。

「あぐ……」

その足は優美子の顔面にヒットしてしまう。鼻に来る痛みと垂れてくる鼻血。

優美子が怯んだすきに、美那子は自由になった手でシャンプー容器を持つと、それを礒江に向かって投げ

つける。至近距離から頭に当てられたシャンプー。

礒江も怯み、一旦離れて自分の頭を摩るのだった。

美那子は我を忘れて行った動作の結果に、少しばかり良い気持ちになったがそれはほんの一瞬だった。礒江の怒りにあふれた表情を見てすぐに今の心境が一変する。

「てめ……このクソアマがあ！」

男のような口調と睨みつける鋭い視線。そして鬼の形相で近づいて来る礒江に激しい恐怖を感じる美那子。そう、ここで始めて美那子は本当の恐怖を感じたが、全ては遅かった。

「ギャアアアア！」

脅えた美那子の髪を掴む礒江。悲鳴を上げる美那子。

そして鼻を少し負傷した優美子は、美那子の両腕を

交差させて掴んでいた。

「この馬鹿女が！ よくも私の鼻を……どうしてやろうか……」

「取り合えず水責めよ。頭を冷やさせてやるわ」

そう言うと磯江は、美那子の頭を強引に浴槽の中につけてた。二人の力には及ばない美那子は、抵抗出来ず浴槽の中で苦しんでいた。

「ゴホ……ゴホ……ガッアア……やめ……苦しい。やめて……ああ……アググウウウ……」

一旦水面から頭を上げさせ開放させると、またすぐに浴槽の奥深くに押し込みを繰り返す。それを数回繰り返す度に美那子の表情も苦痛に歪んでいく。

四つん這いにされて頭を風呂の中に着けられて苦

しむ女を見つめる優美子は、その姿に興奮していた。特に丸出しの形の良い尻を見つめ、すぐにでもその割れ目を開き、そこに存在するアヌスを観察したかったが、焦らずに猥褻な思考だけで満足していた。

「はあ……はあ……やめて……やめなさいよ！ ゴホ……ゴホ……ちょっと……水が……水を飲んだわ……あ……あああやめ……ガフ……」

磯江は美那子の必死に訴える、その情けない姿を堪能すると、またも顔面を水に浸けてしまう。そして数秒経過すると髪を引っ張り浴槽から引きずり出し、苦痛に苦しむ美那子の表情を確認する。

「が……があ……ああ……ちょっと……殺す気……ううう……ああああ……」

たまらない水責めに恐怖を感じ、涙が数滴流れてい

たが、今行われた責めのおかげで顔面全体がびしょ濡れになっていた為、涙の痕跡が分からないのは美那子の唯一の幸いだと言えた。

「おら……ちょっとは私達の怖さが分かった？ んん……どうしたのよ。さっきの勢いは？ なんとか言えよ！」

磯江の乱暴な言動に続き、優美子も鼻を押えて嘍りだす。

「痛ったいわ。まだ少しズキズキするわ。あんたのせいよ。このアホ女が！」

そう言い放つと、優美子は浴槽の桶にしがみつき震える美那子の尻を蹴飛ばした。

この数分間に数々の屈辱を味わう美那子。いままでは常に人を見下し落とし入れる事をしてきた彼女

からしてみれば、耐えられなかった。

「悔しそうね、美那子さん。でもいままでしてきた誤
ちの償いと思えば受け入れられるんじゃないの？
覚悟しておきなさいよ。今日はあなたが経験した事
のないような屈辱を味わわせてやるからね」

「……ぐ……ゴホ………な……なにをするって…
…言うのよ。うう……こんな低俗なことを……」

「あら、さすがね。プライドの高い婦人だけの事はあ
るわ。さっきの責めを受けてもまだ強気の態度なんて。
いいわよ。その態度をいつまでも保ってね。その方が
こっちも面白いわ」

「そう、そう。あんたが嫌がる事を考えて、あんたが
絶対に出来ない事を無理矢理させてやるわ。フフフ…
…楽しみね。嫌なら断ってもいいのよ。そしたらさっ

きみたいに苦しい事を強制させるまでよ」

「……な……なんて事を……この私に……この私に……
……なにが目的……なにが……」

「なにが目的？ まだ分からないの？ 今言ったじゃないの。あんたを徹底的に辱しめるってね。あんた
みないな高慢な女はやっぱり羞恥責めが一番ね。

まあ、それはあとからにして、取り合えず磯江に謝りなさい」

「……ふざけないで……なんでこの私が……ぐ……
こいつら絶対に後悔させてやるわ。覚えていなさいよ」

「さあ、謝るの。それともまた、お水をたらふく飲みたいのかしら」

「……い……いやよ……ググググ……悔しいけど…

…悔しいけど……うう……わ……わる……かったわ……」

口元を震わせながら下を向き目を瞑って謝罪した美那子。彼女からすればこの一言だけでも精一杯の言葉だったが、当然の事二人は許すはずはない。

「なに、それだけ？ まったく呆れたわ。たったその一言だけで数ヶ月も苦しんだ私に謝ったつもり？ まだ佳奈美の方がマシだったわよ」

「か……佳奈美。まさ……か、あなたは……」

「そうよ。まずあの女から最初に復讐したわ。あなたは二番目。そして最後は鏡子。フフフ、美那子さん、佳奈美にどんな事をしたと思う？

説明すると長くなるから今度教えてあげるわね。まあ、一言で言うると泣いて許しを乞う程恥かしい事をして

やったわ」

「……………そ………そんな……………」

「さあ、そんな事よりも、もう一度磯江に謝りなさいよ」

優美子が隣から謝罪を煽る。しかし、優美子は沈黙したまま突っ立っていた。

そんな彼女に限界がきた優美子は、怒りに任せて行動に移る。優美子の髪を引っ張るとそのまましゃがませた。

「つ……………いた………ちょっと……………痛いってば……………」

苦痛に苦しむ美那子に冷たく発言する優美子。

「あんたに謝り方を教えてあげるわ。いい？　まず土

下座して誤りなさい。大きな声ですみませんでしたってね」

「ど……土下座？ ……ですって。この私が……………」

美那子の反抗を予想していた優美子は、すでに片手に SM 用のムチを用意していた。そのムチで裸の美那子に向かって叩きだす。浴室にムチの振り下ろされる音と、美那子の絶叫が響く。

子供の頃から過保護に育てられて来た女は殴られた経験などない為、いきなりのムチ叩きは信じられない出来事だった。

「やめて……いた……ちょっと。痛いってば……分かった……分かったわ。するから……土下座を……だからやめてよ」

「そうよ。そうやって素直になりましょうね。今日は

徹底的に教育をしてあげるわ。覚悟しなさいね。
私達の要求は何でも素直に聞き入れるのよ。そうしないとムチや水責め、その他に辛くて苦しい責めが待っているからね。こっちもあんたみたいな馬鹿女には遠慮しないからね」

ムチを持つ優美子の迫力のある言葉を脅えながら聞く優美子は、自然と土下座の姿になっていた。しかし、その姿はただ正座した状態に手を床につけただけだった。当然の事優美子が隣から指摘をする。

「もっと手を伸ばして、ほら、顔は床にすれすれまで近づけなさい。おでこをタイルに密着させるのよ。膝も少し開きなさい」

強制されるポーズは優美子にとっては死にたい位の辱しめだった。裸で行った土下座、それはなんとも猥褻な姿であり、美那子の弾力と張りのある体がまた

一層、いやらしさを撒き散らす。

「さあ、いつまでそんなみっともない姿をするつもり。
さっさと謝って磯江に許してもらいなさい」

「……ううう……わる……かったわ」

「あんたね。またムチが飛ぶわよ？ なにが悪かったよ。いい？ すみませんでした。許して下さいって言いなさい！」

「……すみませんでした。許して……下さい」

「はあ、聞こえません。もう一度お願いします」

「すみ……ません……でした。……ゆる……して……
ください。うう……うううあああああっああ！」

二回目の謝罪であまりの惨めさに泣き出してしまった美那子。土下座の姿で、風呂のタイルに顔を付けて泣き出す女に満たされる磯江と優美子は、この程度ではまだ納得いかなかった。

「あらら、泣いちゃって。なによ、まだ始まったばかりよ。この程度で泣いていたんじゃ身がもたないわよ？

まさか、もう泣き出すなんてね。意外にもプライドの高い女は崩れやすいのね」

磯江がタイルで泣き崩れている美那子に喋っている間に、優美子は美那子の背後に回り、土下座した女の丸出しの尻を見つめていた。

強制されているポーズで、双尻が突き出し尻の割れ目が少しばかり開いている。

しかし、優美子が背後から見ようと思っていたアヌスは、はっきりとは見えなかった。このまま尻の割れ

目を両手で開き目的の場所を観察してやろうと思ったが、それよりも悪戯心が湧いて出た。

優美子は両手を合わせて握ると二本の人差し指だけを伸ばし、その矛先を目の前の安産型の大きな尻の割れ目の中心に向けた。そして、今だに屈辱から立ち直れず泣いている女の尻に向かって容赦なく人差し指を差し込んだ。

「かんちょう！ えい！」

勢いよく尻の割れ目に入り込んだ指は、見事に肛門の中心にヒットした。

「キャアアアアッア！」

いきなりの肛門への刺激に驚き、悲鳴を上げる美那子。敏感な皮膚に、優美子の指の爪が当てられた痛みよりも、優美子が冗談半分で行った子供じみた行動に

怒りと屈辱に心が犯されていた。

「な……なにをするのよ……ふざけんじゃないわよ」

そう言うと美那子は振り返り、後ろにいる優美子に襲い掛かり渾身の力でビンタを繰り出した。バシッと優美子の右頬に手形が残る程の勢いのあるビンタがヒットする。

しかし、そんな美那子の必死な抵抗も空しく、すぐに礒江が取り押さえる。

「離せ！ 離しなさいよ。あんた達二人絶対に許さないからね。この私に……この私によくも！」

礒江の体術であっけなく押さえ込まれる中、怒り狂う女は半泣きで暴言を吐く。しかしその行動は逆効果である。礒江は美那子の腰に手を通し、両手を背中で交差させて掴み押えていた。

美那子は磯江の力で抵抗するどころか体を思うように動かせない。自分のすぐ後ろの女達に背中と尻を無防備に丸出しにしてもがく美那子。

「まったくこの女は。とんだじゃじゃ馬なこと。優美子、押さえつけたから好きにしていよいよ」

ビンタの痛みに苦しむ優美子。ついさっきは鼻を負傷しようやく痛みが引いた頃に再び受けた負傷。震える程の怒りを胸に押え、直立で押えられた美那子の尻に向かっていく。ピッタリと閉じた尻の割れ目、そこに再び両手の人差し指を合わせて指浣腸を行う。

「おら、おら、おら！ なによ冗談が通じない女ね。たかが、かんちょう位で本気になって」

数回に渡り美那子の尻の割れ目に無理矢理入れられる指。何回かは肛門に当たり、羞恥と屈辱にまみれ

る美那子。

「まったく、この女は手をやくわね。ええ……なんとか言いなさいよ」

「……………うう……ぐぐ」

「優美子、ビンタまでされたんじゃ気がおさまらないでしょう？ 美那子のケツの穴でも見てやって落ちて着いたら？」

「そうね。どんな肛門かしっかり見てやろうじゃない」

磯江の平然とした発言を聞き、気の遠くなるような羞恥に襲われる美那子。そんな彼女を無視し形の良いヒップの割れ目を掴む優美子。その瞬間青ざめた顔で叫ぶ美那子。

「ちょっと待って……いや。そんなこと。ウソでしょう。まちなさい。まって……あ……いや」

無常にも割り開かれた美那子の尻。おもいっきり開かれ、現れた肛門は引き伸ばされ本来の原形はなくなっていた。敏感な場所を伸ばされ僅かに感じる痛みは美那子を感じる羞恥心で消し飛んでいた。

「やめて……お願い。見ないで……見ないで」！

狂ったように絶叫する美那子をあざ笑う二人の女。優美子は目の前にある優美子の肛門にどのような事をして責めてやろうか猥褻な思考を働かせ、必死に考えていた。